

ネイハム・テイト作

リア王一代記¹

大和高行・杉浦裕子・小林潤司（共訳）

登場人物

	（配役）
リア王	ベタートン氏
グロスター	ギロー氏
ケント	ウィルトシャー氏
エドガー	スミス氏
私生児	ジョー・ウィリアムズ氏
コーンウォール	ノリス氏
オールバニー	バウマン氏
[バーガンディー]	
案内役の紳士	ジェイボン氏
[老人]	
[医者]	
ゴネリル	シャドウェル女史
リーガン	レディ・スリングスビー
コーディリア	バリー女史
[アランテ]	
衛兵たち、役人たち、使者たち、[二人の悪漢たち]、 お付きの者たち	

畏友トマス・ボウトラー殿²に宛てた献辞

あなたはこの脚本に対して生得の権利をお持ちです。と申しますのも、あなたからのご助言によって、このたびの改訂版による『リア王』の復活上演を試みる運びになったわけですから。他ならぬ

-
- 1 本稿は独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））「シェイクスピア劇の材源・改作とイギリスの帝国化400年の関係についての研究」[平成25年度～29年度]（課題番号26370282）（研究代表者：大和高行、研究分担者：丹羽佐紀、小林潤司、山下孝子、杉浦裕子）による研究成果の一部である。
- 2 劇作家サー・アストン・コケイン（Sir Aston Cockaigne）の従兄。コケインの劇 *Trappolin Suppos'd a Prince* をテイトは笑劇 *A Duke and No Duke*（1684）に翻案して大成功を収めた。

あなたの説得力とシェイクスピアの全作品に対する私の熱愛があればこそ、このような大胆極まる企てに着手する気にもなったわけです。やってみて分かったのですが、この物語を再構成するにあたっては、時に、原作に何ら典拠を求められない場合でも、主要人物たちのためにその性格に合った台詞を書くという困難な仕事に取り組まざるをえません。リア王の真正の狂気、エドガーの偽装の狂気には、我らがシェイクスピアの創造的な空想力からでなければ到底生まれ出ないような（他に表現のしようもないのでこう書きますが）度外れた自然がふんだんに含まれております。比喩も言葉も、あまりに異様で予想を裏切るものであるにもかかわらず、適切かつ妥当であるため、シェイクスピアでなければこんな着想はできないだろうと認めつつも、これこそがこのような状況で語られるべき唯一無二の正しい台詞だと膝を打つのです。いまだ糸に通されず磨かれてもいない宝石の山というあなたの評言に当てはまるものをすっかり見出したわけですが、その宝石の絢爛たる散らかりぶりに目がくらむあまり、即座に財宝を我がものにしたこと気づいたのです。物語の均整と蓋然性における欠落があって、それを修正するための一つの方法があること、しかもそれは物語全体を貫いて展開されるべき要素であることに気づいたのは我が好運でした。原作では終始ことばを交わすこともないエドガーとコーディリアの間の恋愛という要素です。この要素を補うことによって、第1幕第1場でのコーディリアの冷淡さと父の癡癡が納得できるものになります。同様に、エドガーの変装も是認されるものになります。生き延びるためのつまらない小細工に過ぎなかったものが、思いやり深い計画に変ずるからです。物語の哀感は、これによって明らかに高まります。また（おそらくは）価値があるという以上に効果がある新しい場面をひとつふたつ書き足すきっかけにもなりました。この改変のおかげで必然的に物語を、罪なくして苦しむ人々が栄える結末にすることになりました。そうしなければ、舞台に死体の山を築くことになってしまったでしょう。このようなやり方によって多くの悲劇が場違いな笑いで幕引きになってしまうものなのです。しかしながら、これほど大胆な変更を取えてすることについては、観客の好意的な反応を確認するまでは少なからぬ不安もありました。もしも読者を満足させることができれば、疑いの余地なく満足を与える証言³を示すことができます。また、悲劇を幸せな結末で終わらせることは些細な仕事ではありません。殺すよりも命を救うほうが困難なのですから。短剣や毒杯はいつも手近に準備されているものですが、筋立てを破局ぎりぎりまで押し進めた末に、そこから作りものらしくないやり方ですっかり回復するというのは、作家の技量と判断力を要する難業ですし、上演中も作家は気が気ではありません。

もう一つお詫び申し上げなければならないのは、この劇に新たに書き加えた部分には、比較的技巧的でない表現を用いたことです。実は、ある部分では我がシェイクスピアの文体に合わせて場面間の調和を図り、別の部分ではここで表わされている時代と人物にある程度似せるようにするというのが私の目論見だったのです。この作を文体の審判者にして手練でもあるあなたの手にすっかり委ねます。自然の女神は、あなたが外遊なさる前に、我が国特有の気難しく冷笑的な気質を抜き去ったため、あなたが外国から持ち帰ったのは、旅による洗練であり、しかも気障なところはまったく

3 この証言とはドライデンの『スペインの修道士』の序文を指す。この悲喜劇が1680年11月頃に出版された際、ドライデンは序文で「観客は憂鬱な場面が続くにはうんざりしている」と述べている。

ないのでした。以下のページには数多くの欠陥があることは承知しておりますし、さらに多くの欠陥をあなたが発見されることは疑うべくありませんけれども、あなたの友情をいいことにして、欠点も含めてすべてをあなたに捧げ、わが身を委ねます。

感謝をこめて

頓首啓白

N. テイト

序詞

しばしば思い違いからこの上ない喜びが生まれる以上、
（仮面舞踏会では古女房ですら美しく見えるのですから）
今日は、新しい作者の名前で古き正真正銘の芝居の
客寄せをするのも一興。

しかしながら今夜の演し物を準備しました者は、
あらかじめこう宣言することをきっぱり決心しております。

お客を楽しませるのは大昔の演じ物に限ると。

それでも望みを捨てぬのは、これが豊饒なシェイクスピアの大地の産物であり、
真の鑑識眼を持つ人々に喜ばれる趣きを具えているからであり、
かつ作者の野心は少数の具眼の士を喜ばせることだからです。

(10)

もしこの花束がたまたま

抗しがたい当今の時流の中でも新鮮な美をまとっているとすれば、
まさにこれこそシェイクスピアの称賛すべきところ。どんな田夫野人も
おびただしき花々から選りすぐりの花束を作る術を心得ており、
武骨な手で束ねた花束がひときわ麗しく見えることもあります。

しかしその花を最初に育てたのは神の御技。

精神を教えかつ楽しませるところが見出される場面の数々が
どうして世に表れないことがあるのでしょうか。

教え導くことは常に芝居にふさわしい仕事でしたが、
現代においては必要なことでもあります。

(20)

聖職者が、入り組んだ筋を仕組むという詩人の領域を侵している以上、
劇詩人は、教えるという教会の仕事を引き受けなければなりません。

しかし我ら詩人はこの仕事の取り替えでは劣勢に立たざるを得ません。

坊様が企みを凝らす世に、我ら詩人の説教など何の役にも立ちませんから⁴。

4 これらの詩行は当時のトピカルな政治的出来事、すなわち、1678年の教皇主義者陰謀事件と1680年の王位継承排除危機（カ

第1幕第1場

私生児、一人で登場

私生児： 自然こそが、我が女神。あなたの掟にこそ

俺の奉仕は捧げられることになっている。であれば、
俺が情性に従っただけの愚鈍な過程で創られなかったからといって
なにゆえ息子としての権利を奪われているのか。
なぜ、私生児なのだ、何ゆえ、卑しいのだ、
俺だって貞淑な夫人の子どもと同様に
寛大な心と均整の取れた体を持っているのに。なぜ俺たち私生児は、
卑しいと思われなければならんのだ。自然の肉欲がこっそり創った俺たちは、
黴びた夫婦の寢床でけちけちと合成された誕生よりも
エネルギッシュな性質を受け継いでいるのに。

(10)

それならば、嫡子のエドガーよ、お前の法にかなった権利に
俺は私生児の狡猾さで対抗しよう。

俺たちの父親の愛情は、私生児エドモンドに対しても
嫡子エドガー同様に注がれている。すでにうまいこと
父と兄の御しやすい性質に罠を張った。

さあ、ご老人がやって来る、俺が兄のエドガーについて
最近でっちあげた情報に心をかき乱されて。

その話はもっともらしく聞こえ、大胆に発せられた上に
幸運としかいいようのない偶然にも助けられ、

今や何かちょっとしたことでもあれば、疑いは確信に変わる。

(20)

そして卑しい生まれのエドモンドが、法の規定に拘わらず家督を受け継ぐのだ。

ケントとグロスター登場

グロスター： いいえ、伯爵。あなたは慈悲心が

ゆきすぎてあの子をかばっていらっしゃるのです。

あなたご自身も父親であるからには、

最初に生まれてももっとも可愛がられた息子から突きつけられる、

反抗という針の痛みがわかるでしょうに。ああ、邪悪なエドガーめ！

ケント： そのように無思慮になりなさるな。すべてはでっちあげかもしれぬし、

時があなたのご子息の義務を明らかにしてくれるでしょう。

グロスター： 荒れ狂う海に懇願し、吹きすさぶ風を理性でおさめるがいい、

だが、私を納得させることはできんぞ。私はこれまで
(30)
父親の愛情を通して見ていたために、息子の悪巧みを見抜けなかったのだ。
しかしこのお天道様とあなたが証人だ、
息子を私の財産相続権からも、
私の心からも、我が血縁と家名からも縁を切ることの。

私生児： 願ったとおりにうまくいっている。さて、姿を現すか。

グロスター： おや、エドモンド！よく来たな。ああ、ケント伯爵、
ここに自然の掟の逆転現象、グロスターの名誉と不名誉の逆転現象があるのだ。
この私生児は、私の若かりし頃の放蕩の賜であるが、
私に対してあらゆる子としての務めを果たしてくれる。
(40)
それに引きかえエドガーは、天に請われ名誉を背負って生まれてきたのに、
私の白髪頭に厄災ばかりもちかけて、絶えず私に
若かりし時の喜びを年老いてから呪うように仕向ける始末。
さあ、エドモンド、お前が兄の罪のために泣くことはない。
ああ、優しいやつだなあ。お前は兄の血の半分しか分かち合っていないのに、
兄弟の持つべき自然の情以上に兄を愛している。
だが私はお前の美德に報いよう。ついて来なさい。
伯爵、あなたは王にお仕えですが、王は先頃
統治という苦勞から解放され、王国を娘御たちに
分割する決心をなさったようですね。国の繁栄に天の御加護を。
けれども私は変化をととても恐れています。

ケント： 見るのも痛ましいことですが、
(50)
近頃王は頻繁に激しい痼癢の発作に襲われ、
王としての威厳も損なわれるほどなのだ。

グロスター： ああ、それは老齡ゆえの病。
とはいえ、王のご気性はかねがね不安定なものだった、
怒りっぽくて、気まぐれで。さあ、一同がお越しになります。

ファンファーレの音。リア、コーンウォール、オールバニー、バーガンディー、
エドガー、ゴネリル、リーガン、コーディリア登場
エドガーは入り口でコーディリアに話しかけている

エドガー： コーディリア、美しい姫、もう一度だけ振り向いて下さい。
バーガンディー公爵が、あなたの美という宝を
王から首尾良く受け取り、

永久に独占してしまう前に。

惨めなエドガーに、憐れみのまなざしを投げかけて下さい。

(60)

コーディリア： まあ、惨めなエドガーが、

もっと不幸なコーディリアに何を望むというのでしょうか？

父上の意思に従って

あなたの腕からバーガンディーの腕へと飛び立たねばならない私に。

リア： オールバニー公とコーンウォール公よ、

バーガンディー公に付き添ってくれ。

オールバニー： かしこまりました。

リア： 地図をくれ——さあ、諸卿、

余は我が王国を三つに分割した。

国の統治という長きにわたる苦勞からこの身を解放し、

全てをお前たち若い世代に譲ろうと決心したのだ。

(70)

あなた方、バーガンディー公、コーンウォール公、そしてオールバニー公は、

我が愛の印を得ようと宮廷に長く逗留なさった。

今こそそれにお応えしたい——娘たちよ、話してくれ、

お前たちの中で誰が一番余を愛しているか。その者に余は

もっとも恵まれた最大級の贈り物を与えよう。

ゴネリル、我が長女よ、お前から話さない。

ゴネリル： お父様、私はお父様を言葉では言い表せないほど愛しています。

その愛は、高価で貴重なものといった価値の測れるものを超えています。

あるいは自由や、この目、健康、名声、美といったものでさえも

半分の価値ありません。お父様なしでは私の命は無駄というもの。

(80)

子が父親を愛する際の最大の愛で、愛しております。

リア： これらの境界線の中全てを、この線からここまで、

うっそうと茂る森と広々とした牧草地も含めて

お前のものとしよう。お前とオールバニーの子孫が

永久に受け継げるようにしよう——さあ、次女のお前は何という？

リーガン： お父様、お姉様がすでに私の愛の一部を言葉にしてくださいました。

私のお父様への愛も、お姉様の愛に勝りこそすれ、引けは取りません。

私の喜びの全てはお父様の愛の中にあるので

他の喜びを味わう感覚を私は持ちません。

リア： であれば、お前とお前の相続人たちには

(90)

我が美しい王国のこの豊かな三分の一を残すことにしよう。

コーディリア： (傍白) 次が私の試練の順番。なんて気の重いことかしら。

癪癪持ちのお父様を冷たい言葉で怒らせて、

私を望まぬ人の腕に託して呪うよりは、むしろ

持参金なしで放り出してくれるよう仕向けなければならないなんて。

リア： さあ話さない、我が愛において決して最小ではない末娘よ。

これで私の国への務めも終わりというもの——コーディリア、話さない、

姉さんたちが得たものよりもさらに豊かな残り三分の一を

得るために、お前は何と言うのかな？

コーディリア： 言葉においては私の愛はお姉様達にかないませんが、 (100)

真実においては勝っています——言うことは何もありません、お父様。

リア： 無からは何も出てこぬぞ。言い直せ。

コーディリア： 不幸せな性分で、真意を隠すことができないのです。

私はお父様を愛しています。そうあるべきように。

それ以上でも以下でもありません。

リア： 注意しろ、コーディリア、

お前の財産がかかっているのだぞ。そのことをよく考えて、

少しは言葉を繕え。

コーディリア： お父様、

お父様は私を生み、育て、愛して下さいました。

私は当然の義務としてそのご恩返しをし、

お父様に従い、愛し、敬います。 (110)

お姉様たちはどうして夫をお持ちなのでしょう。お父様だけを愛するとおっしゃるのなら。

もし私が結婚すれば、誓いを交わした夫の手が

私の愛の半分を持つことになりましょう。

それゆえ、私はお父様だけを愛するため、

お姉様たちみたいに結婚などいたしません。

リア： 本気で言っているのか。

わしは癩癪持ちだと言われている。神々よ、お裁き下さい。

それでも怒る理由はありませんか。小娘め。

薄々は勘づいていたことだが、これで本当だと分かったぞ。

グロスターの叛逆的な息子をお前は好むのだということを。 (120)

お前がわしの望みに対してそうであるように、自分の父親に対して不実な奴を。

ああ、注意するがいい。無分別な娘よ。余は

お前の馬鹿な望みに従うことなどないぞ。後悔しても

遅すぎるだろう。というのも、余の性質からいって、

これほど若いのに、あまりにも冷たい子に耐えられぬということを知るがいい。

コーディリア： こんなに若くて、心がまっすぐなのです。

リア： ならば、まっすぐな心とやらが持参金だ。

というのも、神聖なる太陽と厳肅なる夜にかけて、
今ここで誓う。父としての心遣いをことごとく断ち切り、
今この時から、血筋の上でも、愛情の上でも、
お前を赤の他人とみなすと。

(130)

ケント： 狂気の沙汰だ。

陛下、どうか思いなおしてください。

リア： 黙れ、ケント。

龍の怒りに立ちふさがるな。

わしはこの子を一番かわいがり、その優しい世話に

我が齢を安らかに委ねようと思っておったのだ。

安らかに墓に納まるためにも、今こいつから

父の情けを取り上げておく。それと共に、我が財産の全てもやらぬ。

コーンウォール公、オールバニー公、

お二人にはコーディリアの没収された持参金たる

三分の一を受け取る権利を与えよう。

(140)

いいか、両卿よ、わしの最終決断を順守せよ。

わが身は百名の騎士をかかえ、

ひと月交代でそなた方のやっかいになることにする。

この身に留め置くのは王の称号のみ。

収入と実権はそなたたちのもの。

これが余の最終意思であり、その印として

この王冠を分かち与える。

ケント： 陛下、

私は常に変わらず陛下を王として従い、

父として愛し、主君として従い、

庇護者として神に祈ってまいりましたが――

(150)

リア： 下がれ。弓は引かれた。矢面に立つな。

ケント： いやでございます。矢をお放ちください。心臓を射抜かれても構いません。

リアが狂うのなら、ケントも無作法になります。

あなたの末娘は――

リア： やめろ、命はないぞ。

ケント： どうなさるおつもりです、ご老人よ。

リア： 失せろ。

ケント： 先ず、よくご覧ください。

リア： そうか、では神々にかけて――

ケント： そうです、神々にかけて。性急な王よ、陛下の誓いの言葉は神々の耳には

届きません。

リア： はっ、謀叛人め――

ケント： リア、この喉を刺し貫いて、

主治医を殺すがいい。だが、最後の一息で、

あなたの耳に、私の公正なる申し立てを轟かせ、

(160)

あなたは間違ったことをなさっていると面と向かって言いましょう。

リア： 聞け、向こう見ずな男よ。貴様の忠節にかけて、聞け。

貴様はわしに誓いを破らせようとし、

既に下した宣告とその実施の間に割り込んだ。

それは、余の性分からも、余の地位からも、容赦できぬこと。

それゆえ、貴様を余の視界ならびに王国から

追放してやる。もし三日の期限が切れても

貴様の忌々しい身が余の領土内で見つかれば、

即刻死刑だ。行け。

ケント： ご機嫌よう、陛下。そう決断されたからには、

(170)

あなたのことをお言葉通り受け取り、ここに留まって

その凋落を見ることはいたしません。神々よ、

正直に考え、最も正しく発言なさったあの娘さんをお守り下さい。

かくして、新しい土地に、我が古い真実を抱えてまいりましょう。

ここには友愛の生きる余地はない。ここに留まることが追放だ。 [退場]

リア： さて、バーガンディーよ。彼女の値が落ちたことを知っても、

そなたの好意が変わらず、

依然として彼女に向けられるものであるならば、持参金なしで、

余の土地もなしで、そなたに差し上げたい。彼女を受け取るか、それとも、残して行かれるか。

バーガンディー： 失礼ながら、リア王、私はあなたご自身が提示された

(180)

持参金を要求したく存じます。そして、ここで、バーガンディー侯爵夫人

コーディリアの手を取ります。

リア： では、彼女を残して行かれよ。父の怒りによって、

彼女の全財産は奪われたのだから。去るが良い。

バーガンディー： それでは、陛下、我々の婚姻の不履行は

私の心変わりではなく、あなたご自身の意思に基づくものであると

お考えなしますよう。 [エドガーとコーディリアを残して全員退場]

エドガー： 天はわが愛の価値を評価して下さったのか、

それとも、私の病的な思考のたわごとなのか。

バーガンディーがあればほど豊かな獲物を捨て、

(190)

絶望しているエドガーの両腕に残すなどということがあり得ようか。

あなたの手を、コーディリア、私は本当に握りしめていますか。
この瞬間にも、私が嫌う恋敵たちを一つにしていたかもしれない
その手を。あなたの前で跪きましょうか、
そして激しく脈打つこの心臓をあなたの足元に差し出しましょうか。
姫、微笑んで私を納得させて下さい。というのも、
私はまだ疑っていて、まぶしい喜びを信じることができずにいるのです。

コーディリア： お父様のご寵愛を失ったのが、
忌まわしい罪の穢れなどのせいではなく、
ない方がかえって恵まれているといえるような、 (200)
流暢に偽りを述べる舌を持っていなかったからだったことはせめてもの慰め。
ああ、お姉様がた、お二人の欠点をそれに相応しい呼び名で
名指すことはしたくありません。どうかお父様を大事になさって。
誤解されたコーディリアは、これ以上の繰り言は金輪際申しますまい。

エドガー： 自身が巨万の持参金にも価する神々しい乙女よ、
星々が輝きに満ちているのにも増して、美德に満ちた女性よ、
エドガーのささやかな運勢⁵が、あなたに受け入れていただくことで、
ありがたい恵みに浴すことができるのでしたら、そっくりその足下に投げ出します。
わがコーディリア、顔をそむけるのですか。
お気に触るようなことをいたしましたか。

コーディリア： 愛するとおっしゃるのですもの。 (210)

エドガー： ではたびたびお気に触ることを申し上げたのは確かです。

コーディリアもまたそれをたびたびお許しになったが。

コーディリア： エドガー、あなたの求愛を許した時、

私は王の愛娘でした。
今でも王家に生まれたことを忘れ、
愛する人の財産⁶を頼みに生きていくことなどできません。
それほど卑しい宿命に身を委ねることはできませんから、
どうか努めて愛の熱情を忘れて、
このことで私を煩わせることはもうおやめになって。

エドガー： このように国王はほとんどの国家を苦しめるのだ。 (220)

我々は運命の気まぐれな激流に吞まれて、どれほど翻弄されることか。
驚くべき情け深さで愛しい漂流物を我が腕にもたらししてくれた同じ流れが、
それをひたたくように奪い去り、
荒れ果てた岸辺に残された私はただ嘆き悲しむばかり。

⁵ ここは「財産」という意味でも解釈できる。

⁶ ここは「運」という意味でも解釈できる。

コーディリア：（傍白）この見下げ果てたバーガンディーの下劣さを目の当たりにすると
男性全体が疑わしいものに見えてくるほどだわ。
彼が愛しているのは金。エドガーだってそうかもしれない。
ただバーガンディーよりは礼儀を心得ているものだから、殊勝ぶっているのかも。
そうだとしたら、断る方がかえって恩を施すことになる。
でもエドガーの愛が確かなものなら、いつまでも燃え続ける熱情は
これまで通り私たちの胸を熱くする。彼の愛がそのようなものだと分かったら、
わが心は彼の忠実さを、これまで通りありがたく思うでしょう。
その時こそ、冷淡に見えたコーディリアはエドガー同様情け深かったと分かるのよ。

[退場]

私生児エドマンド、慌てた様子で登場

私生児： 兄さん、ここでお会いできて良かった。

逃げて、身の安全を図って下さい。どこかの悪党が讒言して、
頭に血がのぼった父上は兄さんを殺してやると息巻いています。

エドガー： 悩めるコーディリア！ だが、それにもまして冷酷な仕打ち！

私生児： 聞いて下さい。お命が危ないのですよ、お命が。

エドガー： そんなに重大で残酷な決心を、

しかもそんなに急にお固めになるとは！

私生児： 急ではありません。

(240)

どこかの悪党が時間をかけて手はずを整えてきたのです。

エドガー： だが、もしかしたら冷淡なのは上辺だけで、

私の愛情がどれほど長続きするかを試すためかも。

私生児： 聞いていないな。目を覚ますんですよ、兄さん。

エドガー： 何か言ったか、エドマンド。

即座の死をもたらすような知らせを届けてくれたのなら

泣くことはないのだ。思いやりは、ぐずぐず後延ばしにするものではない。

今こそ、そのような親切な助力に相応しい時なのだ。

私生児： お知らせする暇もないほど、

危険は急速に迫っています。押し迫る激流の進路を変えるよう

(250)

努めますから、その間に逃げることです。

ああ、神々よ！ 後生ですからすぐに逃げて。

エドガー： 許してくれ。深刻な物思いに

取りつかれていたのだ。危険があると言ったな。

逃げてくれということだったが。愛の誓いといえども必ずこうして

終わりがくるものなのだ——お前の言う通りにしよう——ああ、コーディリア！ [退場]

私生児： ははは！ 愚かなやつだ。これほど信じやすい馬鹿正直が相手では

俺の手練手管の見事さも形無しといったところだ。

やつ（たち）ときたら悪事とはまったく無縁だから、

疑うということを知らん。この手紙がうまく

(260)

エドガーが書いたものとして通用すれば、というのも、邪な内容を除いて

やつが書いたとしか思えぬまがい物なのだが、

俺の計略は完璧になるのだ——おや、グロスターが来たぞ。

グロスター登場

グロスター： 待てエドモンド、おいで。今読んでいた紙切れは何だね。

私生児： 何でもありません。

グロスター： では、どうしてそんなに慌ててポケットに

しまったりするんだ。出してお見せ。

私生児： 兄さんからの手紙なんですからね。

封を切ったばかりで、中身を読んだわけではありませんが、

咎められるような内容かもしれないと思い、

(270)

お目に触れぬよう隠そうとしたのです。

グロスター： （読んで）エドガーの筆蹟だな。

「我々が年老いて財産を使って楽しむ術もなくなるまで、財産に指一本触れさせないという父親たちの奸計は許しがたい。このような暴虐にはうんざりだ。この件についてさらに話したいことがあるのでお越しを願いたい。親父が、私が起こさぬ限りいつまでも寝ていてくれることになるなら、財産の半分はお前のものになり、兄の寵愛をほしいままに暮していけよう。エドガーより」

私が起こさぬ限りいつまでも寝ていてくれることになるなら、

財産の半分はお前のものだ。この寛大な父親に齒向かって

エドガーがこんなことを書くとは！ くたばって地獄に堕ちろだ！

(280)

エドモンド、すぐにやつを探し出し、わしの前に連れてこい。

裏切者の心臓に噛みついて、

血まみれの内蔵を復讐に逸るこの腕で押しつぶしてやるから。

私生児： 父上、私の孝心を試すために書かれたものかもしれません。

グロスター： 最近の日蝕と月蝕が予兆していたのは

まさにこれに違いない。情愛は冷め、友情は壊れ、

街では暴動、田舎では争乱、

息子と父の間の暖かい情愛の絆にはひびが入る。

あの悪党を探し出せ、慎重にな。

そうすれば悪いようにはせぬから。 [退場]

(290)

私生児： さて、これで俺の計略は揺るぎないが、だめ押しのために

もう一つ証拠を追加だ。しかも確かな証拠をな。

この計画について我々が相談しているところを親父が
立ち聞きするように仕組んで、騙されているエドガーが
自分のことを非難しているように親父に思わせるのだ。
正直がおれの得になるのなら、おれも
正直になれるのになあ。どれほどありがたい聖者も
上首尾の悪事を邪魔立てすることはできぬのだ！ [退場]

第1幕第2場

ケントが変装して登場

ケント： さあ、追放されたケントよ、もしお前がこうして変装して
追放を宣告されたこの場所で勤めを果たすことができるなら、
お前の主人、リア王も、働きを認めてくれるだろう。

リアが従者を連れて登場

リア： 中に入って、娘に余が戻ったと伝えよ。
お前は何者だ？

ケント： 男にございます、陛下。

リア： お前は何をしている者だ、何が望みだ？

ケント： 私は見かけどおりの者でございます。私を信頼してくれる方に忠義を尽くして仕え、正
直な人を愛し、賢くて口数少ない者と付き合い、仕方のない時には闘いもありますが、魚は食
べません⁷。(10)

リア： お前は何者かと訊いておるのだ。

ケント： 誠心誠意の正直者、そして王と同じくらい貧しき者にございます。

リア： では実に貧しいことになるな。お前は何ができる？

ケント： 真っ当な秘密は守り、凝った話は苦手ですが、平易な伝言をぶっきらぼうに伝えます。
普通の男にできることは私にもできますし、私の一番の長所は忠勤です。

リア： ついてこい、余に仕えよ。

ゴネリルの執事の一人が登場

おい、お前？

執事： 失礼—— [退場；ケント（とリアの家来）が彼の後を追う]

リア： 今、あいつは何と言ったか？ あの馬鹿者を呼び戻せ。

従者： 陛下、よく分かりませんが、どうも御身が

7 「魚を食べない」という表現は以下の三通りの解釈が可能である。1）カトリック教徒ではない、2）（魚料理は肉料理に比べて貧弱とされたことから）魚ばかり食べるような虚弱ではない、3）（魚が女性・娼婦を表すことから）娼婦のつまみ食いはいらない。松岡和子訳『リア王』（筑摩書房、1997）の注釈も参照のこと。

軽々しい儀礼で扱われておられるように見えます。(20)

リアの家来、登場

家来： 陛下、あの者が言うには、娘御は具合がよくないそうです。

リア： なぜあの下郎は余が呼んだのに戻ってこなかったのだ？

家来： 陛下、彼は戻りたくなかったと大変不愛想な態度で答えました。

ケントに連れ戻されて、ゴネリルの執事が再登場

リア： 娘がそう答えるように彼に仕込んだのでなければいいがな。

さて、余を誰だと思っておる？

執事： 私の女主人のお父上だと。

リア： このならず者め—— (彼をぶつ)

ゴネリルが舞台袖に現れる

執事⁸： 私はぶたれる理由はありません、陛下。

ケント： 躓かせられる理由もないだろう、この腐った香水野郎め。(彼の踵を蹴り上げる)

ゴネリル： まったくもって、耐えがたいことですわ。(30)

見過ごすわけにはまいりません。

リア： 娘よ、なぜそんな面をぶら下げておる？

答えなさい、余の目の前でそのしかめ面はふさわしいか？

ゴネリル： お父様、お父様の従者たちの我が物顔の横暴なふるまいは
まったく見苦しいものです。たがが外れたような騒ぎから生まれる
喧嘩をひっきりなしに繰り返します。

お父様にこのことをお知らせして、早く矯正して頂きたいものだと

至極当然の望みを抱いておりましたが、今頃になって、

お父様ご自身が彼らの無法行為を保護し、是認していることに気づきました。

ですからお父様、私は自分の裁量権を行使します。(40)

必要がそれを分別のあることとしていますから。

リア： お前はこのわしの娘か？

ゴネリル： さあ、お父様、お願いですから分別を働かせ、

最近のお父様を本来のお婆から

変えてしまったこのような気質を

早く払いのけて下さいませ。

リア： ここに余のことを知っている者はいるか？ これはリアではないぞ。

リアはどのように歩くか？ このように話すか？ リアの目はどこだ？

わしが誰だか言ってくれる者はおらぬか？

ゴネリル： さあ、さあ、お父様、そうやって大げさに驚くのは

8 この部分の執事のスピーチヘッドはテキストに載っていないが、シェイクスピアの『リア王』ではオズワルドの台詞となっており、ここも前後から考えて執事の台詞と判断するのが妥当であろう。

お父様の新しい悪ふざけの特徴というもの。お願いですから (50)

私の意図をきちんと理解して下さい。

あなたはもうお歳ですから、どっしり構えて賢くあるべきです。

ここにお父様は百人の騎士と従者を抱えておりますが、

彼らの放蕩三昧は度が過ぎて、この私たちの屋敷が

まるで騒ぎの絶えない宿屋か、酒場か、売春宿のようです。

ですから、私の言うことを聞いて下さい。さもなければ、お願いしていることを

命じることになりますゆえ。あなたの従者の数を減らして下さい。

半分は罷免して、そして残った者たちは

お父様のご高齢に相応しい者たちにして下さい。

分際をわきまえさせ、ご自分も立場をわきまえて下さい。

リア： 腹黒い悪魔がここに！ (60)

余の馬たちに鞍をつけて、従者をみな集めよ。

退化した毒蛇よ、わしはお前のもとにはとどまらぬ。

わしにはもう一人娘がおる——お前は蛇か、怪物か、

わしの従者を減らせたと？ 彼らを無法者呼ばわりするのか？

彼らは全て選ばれし者で、稀な資質を備え、

銘々が自分の職務というものを心得ておるというのに——

コーディリア、お前の罪はなんと小さなものだったか？ ああ、リアよ、

お前の愚かさを中に入れ、大切な分別を追いだしてしまった

この門を叩け。行くぞ、行くぞ、皆の者。

（立ち去ろうとして、オールバニーが入ってくるのに出くわす）

恩知らずの公爵、これはお前の意思なのか？

オールバニー： 何がございましょう、陛下？ (70)

リア： 死も同然！ わしの従者五十人を一撃で！

オールバニー： どういうことだ、妻よ？

ゴネリル： 理由をわざわざお知りになろうなどしないで、

父上の毫碌を放っておいて下さい。

リア： 災難が降りかかるがよい。

父親の呪いというむきだしの傷口が

お前のありとあらゆる感覚をつんざくがよい。この老いた愚かな目が

このことを再び嘆こうものなら、わしはこの目を引き抜いて

お前が流した涙もろとも、土くれの中に

投げ捨ててやる——いや、ゴルゴン⁹のような娘、お前はどうも

わしが永久に権威を捨てたと思っておるようだが、 (80)

9 ギルゴン (Gorgon) とはギリシア神話に登場する醜い女の怪物で、その名は「恐ろしいもの」の意。

わしが再び元の姿を取り戻すのを見せてやる。

ゴネリル： 今のお聞きになって？

リア： 造化の神よ、耳を貸し給え。

親愛なる女神よ、聞き給え。もしあなたが

あの女に子を産ませるおつもりなら、計画を変更し給え。

子宮に不毛の呪いを宣言し、

忌々しい体から、自分の名誉となるような子が

決して産まれて来ぬようにし給え。しかしもし子を産まねばならぬなら、

不具の子を産ませて彼女の喜びを碎き給え。

あるいは、おぞましい形をした、このご時勢の怪物、

精神がひねくれ曲がった子を産ませ、そいつの生きていることが

(90)

産まれた時同様に母親を苦しめ、母の頬を

絶えぬ涙でやせ衰えさせ、若い額にしわが寄るようにさせ給え。

そして母親としての産みの苦しみを、恥と嘲りに変え、

自分の罪を呪っても時既に遅しとなるように、そのうえ

恩知らずの子を持つことが、蛇にかまれるよりも

いかに痛々しいかを感じるようにさせ給え！ 行くぞ、行くぞ。 [従者と共に退場]

ゴネリル： 数多くの従者につき従われてこのように出しゃばっていは、

お父様は暴君を演じているようなもの。そして

私たちも意のままになると思っているのよ。

オールバニー： まあ、お前は少しやりすぎたかもしれんな。 [兩人退場]

第2幕第1場

場面：グロスターの屋敷

私生児、登場

私生児： 公爵は今夜ここへやって来る。その機を捉えて、

わが目論見を成し遂げることにしよう。

兄さん、ちょっと話が。こっちへ来て。僕です、あなたの味方の。

エドガー登場

お父様があなたをつけ狙っています。ここから逃げて。

兄さんがここに隠れているのがばれた。

夜闇に乘じましょう。よく思い出して下さい、

コーンウォール公を中傷するようなことを言いませんでしたか、

あなたがオールバニー公の側についていると思わせるようなことを何か。

エドガー： 何も。何故そのようなことを聞く。

私生児： 公爵が今夜急いでここへ来るからです。

(10)

それに、リーガン様も一緒に。聞いて！衛兵たちだ。逃げて下さい。

エドガー： ここに入れるがいい。ここに留まって、身の潔癖を晴らすぞ。

私生児： あなたの無実は、暇な時なら聞かれるでしょうが、

グロスターの怒りの嵐が吹きすさぶ今は聞く耳持たぬ状態。

聞いてもらえる前に殺されるかもしれません。

[エドガー、退場]

あそこにグロスターがやって来る。さて、偽の取っ組み合いときたもんだ。

降参しろ。父上の前に出ろ！明かりをここに。明かりだ！

少し血が出ていれば、必死で切り結んだと思われるだろう。（自分の腕を刺す）

酔っ払いがこれ以上のことをふざけて

やるのを見たことがある。

(20)

グロスターと従者たち、登場

グロスター： おい、エドモンド、反逆者はどこだ。

私生児：

その言葉を聞くと、

身の毛もよだちますが、兄さんが

この暗がりには立っていたのです。

グロスター： 血を流しているな。悪党を追え、

そして、切り刻んでもここへ連れて来い。

私生児：

兄さんは逃げました。

グロスター： せいぜい遠くへ逃げろ。だが、この国にいる限り、隠れることはできぬ。

私の庇護者である高貴な公爵が今夜おいでになる。

彼の名において、布告を出そう。

やつを刑場へと引っ立てた者には褒美をやる。

かくまったものは死刑だ。

(30)

それから、俺の領地は、忠実で親孝行なお前が

継げるよう取り計らおう。

[両名、退場]

第2幕第2場

ケント（依然として変装している）とゴネリルの執事、別々に登場

執事： やあ、おはよう、この屋敷の者かい。

ケント： 返事をする者に尋ねるがいい。

執事： 馬はどこに繋げはいいんだ。

ケント： 泥んこの中。

執事： 急いでいるんだ。俺のことが好きなら、どうか教えてくれ。

ケント： 好きじゃない。

執事： そうか、それならお前なんか嫌いだ。

ケント： 貴様を野良犬収容所にぶち込めば、嫌いだとも
言っておられまい。

執事： どういう意味だ。俺はお前なんか知らんぞ。 (10)

ケント： だが、あいにく貴様のことは知っている。

執事： 知ってるって、何を。

ケント： 卑しくて、高慢で、けち臭くて、臆病で、鏡とにらめっこの見栄っ張りで、お節介で気障なろくでなしの悪党。ご主人のためとばかりに女を取り持つボン引きで、悪党と物乞いと臆病者と淫売の小姓のごった煮だ——

執事： 何てけしからん野郎だ、知りも知られもしない相手に向かって
悪態をつくとは？

ケント： 何て恥知らずの野郎だ、たった二日前に国王のご前で突き飛ばされたのに、俺のことを知らぬとは。抜け、悪党。さもなくば、貴様の脳天を打って、月が輝くようにしてやろう。

執事： こいつはいったい何が言いたいんだ？——お願いだ、
お願いだ。お前に用はない。

ケント： 貴様の悪党の所業を知っているぞ。国王を陥れる手紙を届けに来たな。わが若き虚栄姫の役を演じて、父王に楯突く気か。抜け、悪党。

執事： 人殺しだ、人殺しだ、助けてくれ！

ケント： わめくのか、めかし屋め、この木偶の坊め、逃げるな、おしゃれ野郎。

執事： 助けて！ 人殺し、助けて。 [執事、退場。ケント、後を追って退場] (30)

ファンファーレの音。(お付きの者たちに付き添われて) コーンウォール公とリーガン、
それに、グロスターと私生児が登場

グロスター： 皆様、ようこそ。お越し下さって光栄です。

公爵： グロスターよ、そなたの命が不敬な息子に脅かされたという
悲しい知らせを聞いたが、
エドモンドがここで最も完全なる忠義を払ったそうだな。

グロスター： 私生児らしからぬことをいたしました。兄を捕えようとして、この
傷を受けたのでございます。

公爵： 追手は放ってあるか。

グロスター： はい。

リーガン： あの謀叛人を捕えてその首に法の裁きをなすがために、
私たちの権威を用いなさい。

エドマンド、その美德を示したあなたに対して、 (40)

これから先、そなたは私たちの部下といたしましょう。

そのように揺るぎない信頼の性質を私たちはもっと必要としているのです。

（傍白）魅力的な若者だわ、後で役立つかもしれないわ。

公爵： グロスターよ、安心なされよ、

大船に乗ったつもりで。今夜は歓楽のうちに過ごそうではないか。

グロスターよ、やっかいをかけることになろうが、我々の好意の印として、

今夜そなたの世話になろう。

さあ、気晴らしをしに行こう——あれは誰だ。

執事がケントに追いかけて登場する。

グロスター： 一体何事だ。

公爵： 鎮まれ、命はないぞ。手を出した者は死罪だ。 (50)

お前たちはどこの何者だ。

お付きの者： 使者でございます。一人はあなたのお姉様からの、

もう一人は国王からの。

公爵： 争いのもとは何だ。言え。

執事： 息をするのがやっとで、閣下。

ケント： そうだろうとも、なけなしの勇気を振り絞ったからな。

自然もこの卑劣漢を作った覚えはないと言うさ。めかし屋の貴様を作ったのは仕立て屋だ。

公爵： 言え、どうしてこんな喧嘩になった。

執事： この老いぼれの悪党が、まあ、髭に免じて命だけは

勘弁してやりましたが——

ケント： 香水瓶め！

俺の髭に免じてだと——公爵、お許しいただけますなら、 (60)

この麝香猫（ジャコウネコ）を漆喰に混ぜてやります。

公爵： 余の御前をわきまえぬか。

ケント： わきまえております。ですが、腹が立てば忘れるのが特権です。

公爵： なぜ腹を立てる。

ケント： 勇気、地位、正直さを全く持たぬこんな下郎が

剣を携えているからです。

霜と火も、私とこの下郎以上に

憎み合ってはおりません。

グロスター： なぜこの男を下郎呼ばわりする？

ケント： 顔つきが気に食わぬ。 (70)

公爵： おおかた、わしの顔も気に食わぬのだろう。あの顔もこの顔もな。

ケント： 率直さが私の売り物。有り体に言わせていただくが、

わしが若かりし頃には、ここに雁首揃えているよりは
ましな顔があったものですわい。

リーガン： 一度ぶっさらぼうな口をきいて誉められると味をしめて、
それからというもの、生意気な無頼の徒を気取る手合いですよ、これは。
この横柄な連中のことはよく心得ています。
ぺこぺこへつらう家臣を二十人合わせたよりも
腹黒い魂胆を、その率直さの中に隠し持っているのです。

公爵： 何をして、こいつをこれほど怒らせたのだ？ (80)

執事： いえ、何もしておりません。
最近、些細な誤解から国王陛下が
私を打擲あそばしたところ、
この老いばれの悪党が虎の威を借りて、
後ろから私の足を払って倒し、それを王様がお誉めになったものですから、
その厚かましい所業を誇って得意になり、
ここで再び剣を抜いて襲いかかってきたのです。

公爵： 足枷を持て。思い知らせてやる。

ケント： お仕置きされていい子になるような年齢ではないわ。
足枷などご無用。私は王様の家臣ですぞ。 (90)
陛下の御用でこちらに遣わされたのです。
陛下の使者に足枷をかけたりすれば
他ならぬ陛下ご自身に対する
法外な無礼、法外な悪辣さを示すことになりますぞ。

公爵： 足枷を持て。わが命と名誉にかけて、
この男を正午まで足枷にかけてやる。

リーガン： 正午までですって？ 夜まで、いや一晩中でもかけてやるといい。

ケント： おやおや、奥様、わしが父上の犬であったとしても、
そんな扱いはなさらぬはず。

リーガン： 父の家来の悪党だから、こうしてやるのです。 (100)

グロスター： どうかお願いします。ここはお慎みいただきたい。
この者の過失は重大ですが、それを罰するのは
主君たる王のお役目。御使者をこのように軽んじられたら、
ご立腹なさはることは必定ですぞ。

公爵： 責めはわしが負う。
義姉上ならば、ご自分の執事が暴行を受けたりしたら、
これしきではすまぬであろう。では、用事があるので。 [退場]

グロスター： 気の毒だが、公爵様のご意志だから仕方がない。

足枷をかけられたままのケント。リアと従者たち登場。

リア： 不思議なこともあるもの。揃って屋敷を留守にしながら、
わしが遣わした者を返してよこさぬとは。

ケント： ご機嫌よろしゅう、王様。

リア： なんだ、お前はこのような辱めを気晴らしにしているつもりか。
お前が何者かを弁えず、足枷などかけたのは
いったい何者か？

ケント： 例のご夫婦、婿殿と娘御でございますよ。

リア： まさか。

ケント： 本当です。

リア： そんなはずはない。

ケント： 本当なのです。 (150)

リア： ユピテルにかけて、そんなはずはない。

ケント： ユーノーにかけて、本当だと申し上げます。

リア： そんなことを敢えてするはずがないし、
できるはずもないし、できてもやらぬ。殺人にも劣る犯罪だぞ、
敬意を払うべき相手にこのような暴挙に出るのは。
手短に申せ。何を仕出かして
こんな目に遭ったのか、いや、こんな目に遭わされたのか。

ケント： 公爵の屋敷に到着して、
跪いて陛下の書状をご夫妻にお渡ししたところ、
立ち上がる前に、もう一人の使者が、
大慌てで息を切らせて到着しました。あえぐように、 (160)
ゴネリル様よりよろしくとのお言伝にございますとわめき、
手紙を渡すと、それを読んだご夫妻は馬でご出立。
ついて参れ、折りをみて返事を遣わすからと
お命じになりますので、その通りにいたしますと、
くだんのもう一人の使者と鉢合わせ。
そいつのおかげで、こちらの用向きが台無しになったばかりか、
先日、陛下に無礼を働いた
張本人でもあったものですから、
知恵を働かせるより男らしく働くことを身上としている者として、剣を抜いたところ、
臆病な悲鳴をあげて、屋敷中の人たちの眠りを覚ましたのです。 (170)

これを見て婿殿と娘御が、この通りの辱めに
値する重罪だにご判断になったわけです。

リア： ああ、脾臓に宿る怒りが胸にまで膨らみ、

吐き出し場所を求めている——下がれ、こみ上げてくる怒りよ、
お前の居場所はずっと下だ。わしの娘はどこだ？

ケント： 屋敷の中です、陛下。仮面劇をご覧になっております。

グロスター登場

リア： あれは、グロスターか？——はっ！

余と話すのを拒んでいるだと？ 病気、疲れている、
夜まで馬を走らせ通し、そんなのは言い訳にすぎんぞ。
もっとまともな返答を持って来い。

グロスター： 親愛なる陛下、 (180)

ご存知の通り、公爵は烈火のようなご気性の持ち主で——

リア： 復讐の神よ！ 死と疫病と混沌を！

烈火のようなだと？ どんな気性だろうと——おい、グロスター、グロスター、
余はコーンウォール公爵とその奥方と話をするのだ。

グロスター： そのように申し伝えたのですが。

リア： 申し伝えたじゃと！ お前には余の言っていることが分かっておるのか。

よいか、グロスター——

グロスター： もちろんでございます、陛下。

リア： 王がコーンウォール公との面談を望んでおる、そして愛しい父上が
娘との面談を望んでおるのだ。彼女にここに来よう命令するのだ。

既に伝言済みじゃと？ ああ、息もできぬし頭に血が上る！ (190)

烈火のような！ 激しやすい公爵！ そのカッカとした公爵に伝えよ——
いや、まだよい、公爵は具合が良くないだけかもしれぬ。

いつだって病気の時はずべての勤めを怠るものだ。

公爵の許しを請おう。病んだ発作にすぐ憑（と）りつかれて、
健全な人につけてしまう自分の無分別さを反省しよう。

——しかし、何ゆえこの男がここで足枷にはめられておるのだ？

ああ、我が国土に死を！ この行為を見れば確信せざるを得ない、
公爵と娘が表に出て来ないのは

明らかに侮辱であると。余の従者を解放せよ、

公爵と奥方のところに行って、余が話があると伝えるのじゃ。 (200)

今すぐにだ、ここに来て余の話を聞けと申せ、

さもなくば彼らの寝室のドアの前で太鼓を轟かせてやる、
その音で眠りが壊れるまで——

コーンウォールとリーガン登場

おお、来たな？

公爵： 陛下がお健やかでありますよう！

リーガン： お父様、お会いできて嬉しいですわ。

リア： リーガン、そうだろうとも、そうだと考える理由が

わしにはよく分かる。もしお前が父に会って嬉しくないなんてことがあれば、
わしはお前の母親の墓と縁を切らねばならぬからな。

可愛いリーガン、わしが話すことを聞けば

お前はきっと身を震わすだろう。考えたこともなかろうが、 (210)

お前の姉は邪悪だ。ああ、リーガン、お前の姉は (ここでケントは解放される)

貪欲な禿鷹のように忘恩と結託したのだ、

語るに語れないあり様だ。

リーガン： どうか、お父様、辛抱なさってください。おそらく

姉上が義務を軽んじたというよりも、お父様の方が

姉上の価値をよく分かっていないのだと思いますが。

リア： はっ！ 何だと？

リーガン： 姉上がお父様に対する敬意を少しでも怠ったとは

思えないのです。けれどもひょっとして

姉上がお父様の従者の中の乱暴狼藉を取り締まったのであれば、

それは根拠に基づいたことであり、健全な目的があつてのこと、 (220)

全ての責めから姉上の潔白を証明するような。

リア： あの女にわしの呪いが降りかかれ。

リーガン： ああ、お父様、お父様はもう年老いておいでです。

ご自身よりもお父様の状態をわきまえている人の分別に

指図され、導かれることにご同意するべきです。

ですから、お父様、

姉上のところにお戻りなさいませ、そして悪いことをしたとおっしゃるのです。

リア： はっ！ あれに許しを請えだと？

「いや、いや、わしが悪かった。お前にはそんなつもりはなかった。

愛しい娘よ、わしは年老いたと認めよう。

老いばれは不必要だ、だがお前は優しい子だから

わしの弱さを許してくれるだろう」 (230)

リーガン： お願いですからお父様、そんなみっともない痾癪はそこまでにして、

姉上のところにお戻り下さい。

リア： 絶対に嫌だ、リーガン、

あいつはわしの従者を半分に減らして

わしを睨みつけ、心ない言葉でわしの胸を突き刺したのだ。

天に保管された全ての復讐が

あの女の恩知らずの頭に降りかかればよい。邪悪な蒸気が

彼女の子供を不具にするがよい。

リーガン： まあ、ご立派な神なこと！ お父様は気分が苛立つ時には
そうやって私にも同じことを祈願なさるのでしょね。 (240)

リア： いいや、リーガン、お前は決して私の呪いをあびることはない。
お前の優しい性質は、決してお前をあのような親不孝者に
することはない。お前の方がずっとよくわきまえておる、
親子の情の務め、子としての契り、
感謝の念からの義務を。わしが愛情から
お前とお前の夫に王国の半分を授けたことを
お前はよくわきまえておる。

リーガン： お父様、御用の趣をおっしゃって下さい。

リア： 誰がわしの従者に足枷をかけた？

公爵： あのトランペットの音は何だ？

リーガン： あれはお姉様ですわ。お出ましはお手紙に書いてあった通り。
姉上がいらっしゃるのね？ (250)

ゴネリルの執事、登場

リア： まだ苦しまねばならぬのか？

この男は、自分が仕える女の気まぐれな恩寵に
借り物の自尊心を頼っているようなやつだ。
日中は衣装をとっかえひっかえ過ごすような格好つけ男だ。
その上女主人にこびへつらうような伝言を持参しては
気取った様子で嘘を述べ、
大胆不敵な顔でもっと大きな嘘の伝言を持って帰るのだ。
消えろ、ならず者、わしの視界から。

公爵： 何をおっしゃりたいのですか、陛下？

リア： 誰が余の従者に足枷をかけたのだ？ リーガン、おそらく
お前は知らなかったのだろうな。

ゴネリル登場

誰が来たのか！ ああ神々よ！ (260)

あなた方が老人を愛して下さるなら、その優しい統治権が
従順を是とするなら、そしてご自身も年老いておられるなら、
ご自身のこととしてお考え下さい。降りてきて私の役を代わって下さい。
何と、ゴルゴンのような娘、わしに取りつくためにここまで来たのか？
わしのこの髭をみても恥ずかしいと思わんのか？
いっそわしの眼に暗闇を。この眼はわしを騙しておる、

ああリーガン、あいつの手を取るのか？

ゴネリル： なぜ手を取ってはいけませんの、お父様、私が何をしたとおっしゃるの？

分別のない人が罪と見なし老いぼれが罪と呼ぶものが
すべて罪というわけではございませんわ。

リア： 心臓よ、なぜ張り裂けぬのじゃ。 (270)

リーガン： お父様、年寄りは年寄りらしくなさいませ。

今月の期限が切れるまで
姉上のところに戻ってお世話になり、
お供のものの半分に暇を出したら、私のところにいらして下さい。
今は私も屋敷を離れ、お父様をおもてなしするのに必要な用意が
整っておりませんから。

リア： あいつのところに戻れ？ 50人の騎士に暇を出せ？

とんでもない。それよりはむしろ家屋敷を捨てて、
真夜中の狼を友とし、
何も被らぬ頭を無慈悲な風に晒すことを選ぶわ。 (280)
あいつから最小限の必要を恵んでもらうよりは。

ゴネリル： どうぞお好きなように、お父様。

リア： 娘よ、どうかわしの気を狂わせないでくれ。

我が子よ、もう世話にはならぬ。さらばだ。
もう二度と会うまい。二度と顔を合せまい。
来る時に、恥ずかしめがお前に訪れよ。だが、わしからそれを呼び求めはせぬ。
雷神に矢を放てとは頼まぬし、
復讐してくれる天にお前を訴えもせぬ。
できるうちに、心を改めよ、折あらば、善人になるのだ。
わしは我慢できるぞ。リーガンと暮らすのだ、 (290)
わしと百人の騎士は。

リーガン： 失礼ですが、お父様。

まだおいでになるとは思っていませんでしたし、
お父様を歓迎するに相応しい用意もできていません。

リア： それで良い言い訳をしたとでも思っているのか？

リーガン： お姉様はお父様をきちんと扱っています。何ですって！ お付きの者が50人？

それでも十分でない？ 何故それ以上必要なのです？

ゴネリル： お父様、妹なり私なりの召使いを

お付きの者とするとはできませんか？

リーガン： それでいいじゃありませんか？ 万一その者達がお父様をぞんざいに扱うようなことがあれば、

私たちが叱ります——私のところにおいでなら、
その恐れがありそうだけど、
連れてくるお付きの者は25人に願います。それ以上は
譲歩いたしません。

(300)

リア： 我が怒りよ、留まれ、雷よ、じっとしている、
そうすれば、わしは雷神の忍耐力を持つ者となろう。
邪悪な者も、それ以上に邪悪な者と比べられれば、
美しく見える。最悪とならなければ、
称赞に値するというものだ。さあ、ゴネリル、
お前はまた無実になったぞ。お前のところに行くでしょう。
お前の言う50人は25人の倍だ。
お前の愛もあいつの倍だろう。

ゴネリル： お待ちになって、お父様、
25人も、いえ10人だって、5人だって
必要でしょうか。私の家にはその倍の召使いがいて
お世話をしますのに？

(310)

リーガン： 一人だって必要でしょうか？

リア： 血よ、火よ！ 聞け——癩病、それに最も青い疫病¹⁰よ！
地獄よ、その怒りを存分に吐き出し、
その火勢の中に、これらの妖婦キルケーたち¹¹をすっぽりと包んでしまえ。
我が怒りに合わせて復讐の女神たちがいかにこだまさせているか聞くがいい。
彼女たちの蛇の鞭の音を。

リーガン： 癩癩って何て下劣なものなのでしょう！

ゴネリル： あまりに年老いて自尊心でいっぱいだわ。 （稲光と雷の音がする）

リア： 神々よ、忍耐を与え給え、
ご覧ください、神々よ、この哀れな老人を。
年の数ほど悲しみを重ね、押しつぶされております——
もうこれ以上、我慢はしない。お前たち、自然の情にもとる鬼ばばたちめ、
きさまら二人に必ず復讐してやるぞ。
世界中が恐怖におののくようなものを——それがどのようなものかは
まだ分からぬが、この世の恐怖となるべきもの、
そのようなことをやってみせるからな。お前たちはわしが泣くと思っているな。
（ふたたび雷の音がする）

(320)

この心臓が千々に砕けようと、

10 「ひどいもの」のたとえ。

11 キルケーたち（Ciecces）とはギリシア神話に登場する魔女であり、太陽神ヘーリオスと女神ペルセーイアの娘。アイアイエー島に住み、気に入った人間の男がいると島に連れて行って養い、飽きると魔法で獣や家畜に変えて暮らしている。

泣きはせぬぞ——ああ、神々よ！ わしは気が狂いそうだ。 [退場]
公爵： 今宵は荒れた夜で、嵐になりそうだ。 [全員退場]

第3幕第1場

場面：荒野

嵐の中をリアとケントが登場

リア： 風よ、吹け。もっと激しく吹いて、きさまの頬を吹き破れ。
途方もない稲妻よ、焼き焦がせ。焼き焦がせ、わしの白髪頭を。
天の水門に拍車をかけろ、そして、土砂降りを降らせろ。
高慢で恩知らずの人間が作った町や宮殿を
すっかり水没させるまで。

ケント： 必要な避難所をあれこれ言って勧めてみたものの
説得できない。天と地の荒々しい戦いに晒された
彼の年老いた頭にかける、
このみすばらしい覆いさえもかぶって下さらぬ。

リア： 雷よ、ゴロゴロと大きく音をたてよ。疾風と雨と風よ、戦え。 (10)
稲妻も、風も、雨も、雷も、わしの娘ではない。
むごいお前たちを親不孝と責めたりはせぬ。
わしはきさまたちに王国を与えはしなかった。我が子と呼びはしなかった。
わしに尽くす義務は全くない。だから、
存分にわしを苛むがいい。この通り、わしはきさまたちの奴隷だ。
哀れな、か弱い、無力な、蔑まれた年寄りだ。
だが、わしはきさまたちを卑劣な手先と呼ぶぞ。
けしからん二人の娘に味方して、
このような年寄りの白髪頭に、
天の軍勢を差し向けるとは。ああ、ああ、これはひどい。 (20)

ケント： この嵐から避難所を貸してくれる
隠れ場所がすぐ近くにあります。

リア： わしは本性を忘れよう。何だと？ あまりに優しい父、
そう、そこが要点だ。

ケント： 陛下、夜を好む者も
このような夜は好みません。怒りに満ちた空が
闇夜をさまよい歩く獣たちを怯えさせ、
洞窟に閉じこもらせています。このようなびしょ濡れの雨、
このような稲妻の広がり、恐ろしい雷の轟き、

うなるような風の叫びを、これまで知りません。

(30)

リア： 我らの頭上でこの恐ろしいどよめきを

上げ続けさせている偉大な神々に

今こそ真の敵を見出させよう。密かな罪をいだくやつめ、

震えおののくがいい。

身を隠すがいい、血みどろの手よ、

誓いを破った悪人よ、未亡人の涙を飲む

聖なる、聖なる偽善者よ。これら恐ろしい召喚者たちの恩寵に、

今こそため息をついて泣き叫ぶのだ。わしは罪を犯すよりも

犯された人間だ。

ケント： 陛下、あの小屋へと参りましょう。

リア： 理性が焼け始めた。

(40)

おい、小僧。どうした、小僧？ 寒いか？

わしも寒いぞ。おい、その藁床というのはどこだ？

必要の御業とは不思議なものだな、

卑しいものを貴重なものに変えてしまう。おい、哀れなやつめ、

わしの心同様冷たくなっているな。だが、わしにはまだ

お前を気の毒に思う場所が一つ、この心臓がある。 (大きな嵐の音がする)

[両名、退場]

第3幕第2場

グロスターの邸宅

私生児登場

私生児： 天の嵐も人間界の浮かれ騒ぎの騒々しさに圧倒されて静まる。

俺が王座に登り詰めれば、そんな具合に権勢を振るいたいものだ。

王の傲慢な娘たちは、早くもしたい放題の狼藉三昧。

おかげで苦しい重税の軛と重い負担が

あくせく働く貧民たちの肩にのしかかり、

怨嗟の音が虚しく響き渡っている。

全く素晴らしい王女様ぶり！

得意になって人民どもを踏みつけになさっておられる。

かくも堂々として美しい王女様を一度味見してみたいものだ。

お相手には血気盛んなおれのような男こそ相応しいはず。

(10)

まったく望みがないわけでもない。つい今しがた

宴会の最中に、二人ともこの俺に
秋波を送ってきたからな。部屋から出る時も、
それぞれ誘いかけるような笑みをこっそり投げかけてきた。
うれしい手付金じゃないか、うん。

別々の登場口からふたりの召使が登場し、めいめい手紙を渡し、退場。

(読む)「報酬がこれほど明らかである以上、それを直視しないのは、
目が見えないのも同じ。それに応えないのは恩知らずというもの。ゴネリルより」。
分かった、分かった。ご託宣に従って参上仕らなければ、
目が見えない恩知らずになってしまうわけだ、この俺は。
もう一通も読んでみるか。(二通目を開封する。) (20)

(読む)「慎みがあなたの敵でないとしても、私が
あなたの親しき友であることを疑わないで下さい。リーガンより。」
なんて素敵な魔女！血がたぎってきたぞ。
もう待ちきれない、
早く手に入れたくて——おや、親父が来たぞ。
何か用がありそうな顔つきだ。喜びよ、しばらく黙っているよ。

グロスター登場。

グロスター： 探していたぞ、エドマンド。大事な用を
伝えようと思ってな。忠義一途のお前のことだから
われらが主君に対し恩知らずな娘どもが
非道を働いていることに心を痛めていると思う。 (30)

私生児： この上なく酷い、親不孝なことですな。

グロスター： この国の有為転変はしばらく落ち着きそうにない。庶民は
女暴君たちへの不平を口にし、
既に善良なる前の国王陛下の
復位を求めている。陛下への仕打ちが
民を刺激し暴動に発展する恐れもある。

私生児： それは望ましいことです。怖れる必要はありませんまい。

グロスター： よく分かっているではないか。確かに望ましい。
連中もわしに目をつけ、ひっきりなしに指揮官になってくれとの
催促だ。この首がつながっている間は、 (40)
この身は連中のもの。最初は密かな企みから始めて、
その後に公然たる軍事行動に移る。お前のような
誠実で勇敢な人間に相応しい仕事になるぞ。
エドマンド、わしの頼りになる密使になって、

日の出とともに馬を急がせ、（手紙を渡す。）

これをカンブリア公爵に届けるのだ。

コーンウォール公爵家とカンブリア公爵家の間には

これまで激しい確執が絶えなかったことは知っているだろう。

怒りでいっぱい当主は、山育ちの屈強な兵士を二万も

援軍として差し向けてくださるのだ。

(50)

さあ、行け、公爵によろしくな。気をつけて。

私生児：（傍白）分かったよ、騙されやすい親父殿。

よろしく告げ口してやるよ、

コーンウォール公爵様にな——すぐに

お前の筆蹟で書かれ、お前の印形で封印された手紙の中身を

お見せするのだ。そうすればすぐに

怒り狂ったコーンウォールはお前に死罪を宣告し、

お前の多額の収入は俺の手に落ち、

これまで飢えていた俺の欲望を満たしてくれるだろう。

退場しかけたグロスターが、登場したコーディリア【とアランテ】と会う。

私生児は距離を置いて盗み聞きする。

コーディリア： グロスター、どうか後生ですから耳を貸して。

(60)

この通りお願いします。私の嘆きを聴いて下さい。

聴いて下さらねば、聴いて下さるでしょう、いやきつと進んで聴いて下さる。

だって、あなたはいつも義しき善人と呼ばれていたのだから。

グロスター： お望みは何です、姫君。お立ちになって嘆きとやらをお話し下さい。

コーディリア： だめ、聴いたら嘆きの原因を正すと約束して下さい。

さもないとここにいつまでも跪いています。どうか

ひとりの父、ひとりの国王を助けて下さい。

傷ついた父、傷ついた国王を。

私生児： おお、何て魅力的な嘆きぶり。あの女の涙ときたら

花に宿った露のように、美しい飾りになっている。でも、操の正しい女だから

(70)

望みなき欲情の炎が燃え上がっても、もみ消さなければ。

グロスター： 姫君、誰のために助けを請うておられるのかよくお考え下さい。

あなたを不当な目に遭わせた王ですぞ。

コーディリア： 不当な目だなんて。そんな目に遭わされたことはない。あり得ないことです。

でも、驚かないでね、グロスター。どうやら

虐待された父上は、あなたが手を差し伸べる前に

自分が受けた不当な仕打ちのせいで正気を失ってしまったらしいのです
私生児： これ以上見つめるまい——だめだ、目に魔法をかけられたみたいだ。

コーディリア： それともさらに悪いことが？ これ以上悪いことなんてある？

今夜の大嵐が父上のもろい体を刺し貫き、 (80)

寒風と氷雨が身を凍えさせ、

あるいは雷に打たれてお亡くなりになったかもしれない。

もしそうだとしたら、約束を果たす義務はなくなります。

後にはお願いしたいのは、ほんのささやかな一つのことだけです。

父上の息絶えたお体のところまで私を連れて行って下さい。

この衣を引き裂いて、父上の白髪頭をお包みし、

引きむしったこの髪で、両手両足をおしぼりし、

それから、涙の雨で

泥まみれのお顔を洗い清めてから、おそばで死ぬつもりですから。

グロスター： お立ち下さい、コーディリア様、それほど親を思うお気持ちがあれば、 (90)

お姉様方の親不孝を埋め合わせをするのに十分でございます。

実は既に、不当な目に遭わされた陛下の復位の計画を

立てております。あなた様の気高さが、

私たちの計画が速やかにうまく運ぶことを予言しています。 [退場]

コーディリア： さあ急いで、アランテ、

変装のための服装を持ってくるのよ。私たちはこれからすぐに

父上を捜し出して、どうにかしてお救いしなくては。

アランテ： どうやってです？ ご存じないのですか、

親不孝な姉上たちが出した布告を？

お父上を助けた者は死罪だというのですよ。 (100)

コーディリア： この際、復讐の女神たち¹²を怖れている場合ではない。

アランテ： よりにもよってこんな天気の子に？ とくとお考え下さい。

ここから何マイルも身を隠す藪一つございませんよ。

コーディリア： だとすれば父上の隠れ場もないということ。

見つけ出して差し上げる方が思いやりというものです。

女というものはよこしまな愛にかられれば何でもするものですが、

孝心にかられても同じぐらい向こう見ずになれることを

輝かしい実例になって証明しましょう。

吹くがいい、風よ。稲光よ、落ちろ。

処女の無垢ゆえの大胆さで、父なる王様を (110)

死んでもお助けします。 [(アランテと) 退場]

12 ゴネリルとリーガンのこと。

私生児：「変装のための服装を持って来るのよ。すぐに
 父上を捜しに行く」だって——なるほど。幸運なお召しかえだ。
 俺の邪魔になるかと怖れた孝行娘が、
 わが計画の保証人となることが分かった。
 二人の悪党に金をやって、後を追わせ、
 人気（ひとけ）のない場所で生け捕りにさせるのだ。
 一人は女を逃がさないようにして、もう一人が戻って、
 女の居場所をおれに報告させるという手筈だ。俺も変装しよう。
 連中が狩りをしてきている間に、俺はこの手紙を持って
 公爵のところへ行き、それから原野に向かおう。
 逞しきユピテルさながら、嵐の中、
 このセメレー¹³をものにしてやる。戦場に鳴り響く太鼓のごとく
 嵐が女の悲鳴をかき消してくれるだろう。嘆きの声が
 わが哀れみ深い耳を貫き、愛の戦いの荒々しさを和らげることがないように。[退場]

(120)

第3幕第3場

吹き続ける嵐。原野

リアとケント登場

ケント： ここです、陛下。どうかお入り下さい。
 こんな夜に雨ざらしでは、自然の暴虐に
 生身の体が耐えられるはずありません。
 リア： わしにかまうな。
 ケント： さあ陛下、どうか中へ。
 リア： わしの心臓を破りたいのか。
 ケント： お願いですから、どうか。
 リア： お前たちは、この戦さ好きの嵐に素肌まで侵されることが
 大したことだと考えている。お前たちにはそうかもしれないが、
 より大きな病いに憑（と）りつかれたら、
 小さい患いは感じなくなる。わしの心のなかで吹きすさぶ嵐は、
 他の感覚のすべてを五感から消し去ってしまうのだ。感じるのは、
 ただ胸を打つ嵐のみ。子が親の恩を忘れるとは！
 この口が、食べ物を運んでくれるからといって
 手に噛みつくようなものではないか——思い知らせてやる。

(10)

13 ジュピターは落雷の形でセメレー（Semele）の所にやって来て彼女を殺した。

もうこれ以上泣くまい。こんな夜に
親を閉め出すなんて。雨よ、もっと降れ。こんな夜でも
おれは堪え忍ぶ。おお、リーガン、ゴネリル、お前たちに
気前よく一切合切を与えた、この年老いた実の父を閉め出すとは。
このまま行くと気が狂う。そっちに行かせないでくれ。
もうこのことは考えるまい。

ケント： さあ、陛下、ここから入れます。

(20)

リア： よしよし、入ろう。

もうこれで大丈夫。祈りを捧げて、それから寝ることにしよう。
哀れな裸の者たちよ、場所を問わず、
この無慈悲な嵐の攻撃を耐えている者たちよ、
帰る家もなく、食うものもなく、どうやってこの打撃を
持ちこたえているのだ？ みすばらしい風体だからこそ、
こんなひどい時候でも平気なのだ。これまで
このことに注意を払ってこなかった。華々しき者たちよ、
哀れな者たちが味わう苦難にその身をさらし、それを薬にするがよい。
あり余るものを恵まれぬ者たちに施し、
神々のさらなる公正さを示すことができるように。

(30)

エドガー： （小屋の中で）五尋半だよ！ 哀れなトム！

ケント： 何者だ、藁の中でぶつくさ言っているのは？

出て来い。

気遣いを装ったエドガー登場

エドガー： あっちへ行け！ 悪鬼がおいらにとり憑きやがった——サンザシの
棘の間を冷たい風が吹きまくる——ぶる、寝床にもぐりこんで
温かくしてな。

[傍白] はっ、俺が眼にしているのは何だ？

なんと悲しい光景だ、哀れな老王が、頭をむき出しにして
この荒れ狂う嵐の中でびしょぬれとは。言葉巧みなセイレーンよ、
あなた方の父に対する愛の公言はすべてこうなる結果だったのですか？

(40)

リア： 教えてくれ、相棒、お前も全てを娘たちにくれてやったのか？

エドガー： 誰がこの哀れなトムに何かくれるというんだ。悪鬼が哀れなトムを、火の中、炎の中、
藪の中、沼地とさんざん引きずりまわしやがった。悪鬼の奴め、枕の下にナイフを隠し、教会の腰掛に絞首紐を忍ばせては、哀れなトムに得意にさせて栗毛色の駿馬で四インチの橋の上を走らせたり、謀反人と間違えて己の影を追いまわさせる。お前さんの正気に感謝しな。哀れなトムは寒いんだよ、（震える）つむじ風から身を守りなよ、星の祟りと魔女からも。哀れなトムにお恵みを。悪鬼が哀れなトムを苛めるんだ。さあ、さあ、捕まえてやるぞ、そ

こだ、ほれ、今度はそこ。

(50)

リア： やつの娘たちがやつをこのような目に遭わせたのか？

お前は自分に何も取っておかなかったのか？ 全て娘たちにくれてしまったのか？

ケント： この男には娘はおられません、陛下。

リア： 死も、裏切りも、何ものも、人間の性質をこんな卑しき姿に

貶めることは出来ぬはずだぞ、恩知らずな娘以外には。

エドガー： ピリコック坊やはピリコック・ヒルに腰掛けて、ほれ、ほれ、おーい。

リア： 見捨てられた父親は、ああやって

己の肉体を痛めつけるものなのか？

正当な処罰だ。親の血を吸うペリカン娘たち¹⁴を生んだのは

この肉体なのだからな。

(60)

エドガー： 悪鬼に気を付けな。両親には従い、口にしたことはちゃんと守って、やたらと誓うなよ。夫のいる女と関係を持つな、派手な服装に心惹かれるな。トムは寒いんだよ。

リア： お前はこれまで何をしてきたのだ？

エドガー： 心の立派な騎士さ。髪も巻き毛で、香水や洗髪剤も使ってたよ。奥方の情欲に仕えて、密かな情事もしたものだ。口が動く限りに誓いの言葉を並べたて、そのすべてを天使の顔をして破ってみせたものだ。化粧や付けぼくろや衣擦れの音のために、あんたの心を女に売り渡すんじゃないぜ。女郎屋には近づくな、手をスカートの下に忍び込ませず、債権者の証文には何も書き込まず、悪鬼を寄せ付けないことだ。まだサンザシの間を冷たい風が吹き抜ける。ひゅう、ヘイ、ノニー、ドルフィン、しっ、小僧、こら、彼を通しておやり。

リア： いざ死なん。お前もこうして何も身につけぬ体をこの厳しい寒空にさらしているよりは、墓に入った方がましであろう。しかし彼をよく見て考えろ、人間とはこれだけの存在にすぎないのだ。お前は蚕に衣を借りず、獣に皮を借りず、麝香猫に香水を借りていない。はっ、ここにいる我々二人は洗練されているという。しかしお前は、それそのものだ。人間、虚飾を剥げば、お前のような哀れな二足の裸足の動物にすぎない。

脱げ、このような虚しい変装、空っぽの借り物なんか脱いでしまえ。

おれはもとの自分の姿になるぞ。早く、早く、服を脱がせてくれ。

ケント： 天よ、王の正気を戻し給え！

リア： 一つ忘れていたぞ、名は何と言う？

エドガー： 哀れなトムさ。泳ぎ回るカエルやクルミ、ヒシの実を食べて生きてるんだ。しかし悪鬼が怒ると、トムの心も狂って牛の糞を食べ、サラダの代わりに老いた鼠や死んだ犬を飲み込み、淀んだ池を覆う緑の藻を飲むんだ。鞭打たれながら地方から地方へとさ迷うってわけ。昔は上着を三着と肌着を六枚貰って

14 若いペリカンは親の血を吸って育つと伝統的に考えられていた。

馬にまたがり、腰には剣、
 なのにこの七年というもの、
 大鼠や小鼠や小さな鹿がトムの食糧さ。

俺のお供に用心しなよ。静かに、スマルキン、しっ、この悪鬼め。 (95)

リア： もうひと言。だがちゃんと答えてくれよ。教えてくれ、狂人は紳士か、小地主か？

ケント： こうなるのではないかと恐れていたのだ。正気を失ってしまわれた。

エドガー： 悪魔のフラットレットーが俺を呼んでやがる。ネロ皇帝が地獄の湖で釣りをしていると
 言ってるよ。お祈りをするんだ、無実の人よ、そして悪鬼に気をつけな。

リア： そうか、はっ、はっ！ 千匹もの悪魔が真っ赤に焼けた鉄串をもってやつらに飛びかかっ
 たら愉快じゃないか？

エドガー： お立場を思えば涙がこぼれる。芝居を損ないかねないぞ。

リア： 子犬たちがみんな、トレイも、ランチも、スウィートハートも、寄ってたかって俺に吠
 えかかるのだ。

エドガー： トムが脅してやろう。あっちへ行け、野良犬め。

口元が黒いのも、白いのも、
 噛みつけば毒ある牙を持っているものも、 (110)
 番犬、猟犬、モンゲレル犬、
 雄の猟犬、スパニエル犬、雌の猟犬、ブラッドハウンド犬、
 短い尻尾、細い尻尾、長くて巻いた尻尾、
 どんなものでもトムが哀れな声で泣かせてやろう
 トムがこうして頭を振れば、
 犬たちゃみんな、くぐり戸ぬけて、逃げてゆく。

ぶる、ぶる、ぶる、さあ、出かけるぞ、祭りへ、市場へ、町の広場へ、哀れなトムよ、
 お前の杯は空っぽじゃないか。

リア： おい、そちを余の百人の騎士の一人として迎えよう。服装だけが気に食わんが。そちはそ
 れをベルシャ風とでもいうだろう。まあ、いずれにしても変えてもらおう。 (120)

グロスター登場

エドガー： これは悪魔のフリバティジベットだ。晩鐘の時刻になると出てきて、一番鶏の時間ま
 でうろつきまわるやつだ。目を白内障にしたり、馬の鬣をもつれさせたり、目を藪にらみに
 したり、三口をこしらえたり、実りかけた穀物を黴させたり、土の中の弱い生き物を苛める
 のだ。

聖スウィジン¹⁵、寒さの中を三度来ぬ。

彼は悪夢の魔女とその九人の子供に出会いぬ。

彼が彼女に指定したのはまさにその場所。

15 聖スウィジン (Swithin) は40日の天気を支配する。すなわち、Swithin の日 (7月15日) に雨が降る場合、それから40日間雨
 が降り続けるとされる

彼は命じた、眠っている人から降りてもう悪さはしないと約束しろと。

消えろ、魔女め、消えちまえ！

(130)

グロスター： 何と、陛下はこのような者をお供にしておいでだったのか？

エドガー： 暗黒の王子は生まれがいいんだ。モドーと呼ばれているんだ、あるいはマヒュー。

グロスター： 陛下、私と一緒に来て下さい。すぐ近くに、私の貸家があります。

陛下の娘御たちの厳しいご命令に従うのは

もはや臣下として耐えがたきもの。

娘御は私に、城の門を閉ざして、

この荒れ狂う夜が陛下に襲いかかるがままにするよう命じました。

けれどもこうして危険を冒して陛下を探しに参ったのです、

あなた様を火と食料のあるところにお連れするため。

(140)

ケント： どうか、陛下、彼の申し出をお受け下さい。

リア： 先に、この学者と話をさせてくれ。

教えてくれ、アリストテレスさま、雷の原因は何なのだ？

グロスター： お願いですから、陛下、私と一緒に来て下さい。

リア： 余はこのテーベの学者と話がしたいのだ。

そなたは何を研究している？

エドガー： どうやったら悪魔を避け、どうやったら害虫を殺せるかをだ。

リア： では一つ、こっそり尋ねさせてもらいたい。

ケント： 陛下の精神はすっかり混乱してしまった。陛下を無理矢理ここから連れ出しましょう。

(150)

グロスター： 王をお責めできようか？ 娘御たちが王の命を狙っているのだからな。

この狂人は王の心をさらに乱すだろう。おいお前、行け。

エドガー： 騎士ローランド、暗き塔にたどり着き、

彼の言葉はいつも「ファイ、フォ、フム」

ブリテン人の血が匂う¹⁶——ああ、なんたる苦しみ！ [退場]

グロスター： さあ、お味方どの、陛下を我らの腕に抱え

歓待と庇護の待つところへお連れしよう。

陛下、私たちと一緒にお越し下さい。

リア： お前の言うとおりで、リーガンを解剖させてみよう。あいつの心臓になにが巣食っているか見てみよう。このような残酷な心の原因は自然の中にあるものなのか？

(160)

ケント： 陛下、お願いします。

リア： しっ！ 静かにしろ、音を立ててはならぬ。そう、そうだ。朝になったら夕食を食べよう。

16 騎士ローランドはおそらく失われた古いバラッドに由来するが、彼の言葉は『ジャックと豆の木』の物語から来ている。

第3幕第4場

コーディリアとアランテ登場

アランテ： お嬢様、ここでお休み下さい。これ以上探しても無駄というもの。

さあ、ここに小屋があります。どうかここにお入り下さい。

コーディリア： どうかお前が入って、自分の体を休めるがいいわ。

心に重荷がない時は、体も繊細なものですもの。

この嵐は、私自身がさらに受けるであろう苦痛から

気をそらすにすぎないわ。

二人の悪漢登場

悪漢1： 俺たちは彼女たちを十分遠くまでつけてきた。この場所は人目もない。

俺がこの小屋の中で彼女たちを囚われの身とするから、

その間お前は一旦戻って、エドモンド卿をここに連れて来い。

だがまず、捕まえるのを手伝ってくれ。

(10)

悪漢2： (金を示しながら) この愛しい悪魔以外の何物も、

この嵐の中、俺を外出させはしなかっただろう。

だが、仕事にかかるとするか。

(悪漢たちはコーディリアとアランテを掴まえる。二人は悲鳴を上げる。)

静かに、ご婦人、俺たちは味方だ、ぐずぐずするな。

コーディリア： 助けて、人殺し、助けて！ 神様！ 親切な稲妻が

落ちて、死ねたらいいのに。

エドガー登場

エドガー： 何だ、あの叫び声は？ はっ、女性たちが悪漢どもに捕まっているではないか？

悪事に相応しい時と場所か？

野良犬ども、立ち去れ。(長い棍棒で悪漢たちを追い立てる)

悪漢たち： 悪魔だ、悪魔だ！(逃げ去る)

(20)

エドガー： ああ、話して下さい。あなた方は何者なのですか、

か弱い女性と見えるのに、この恐ろしい夜に、人気のない迷路を
警護もなくうろついておいでとは。

ここでは、たとえ満月の時でも、雲がかかって

かろうじて不完全な光を放つことさえ

ほとんどないというのに。

コーディリア： 最初にあなたが何者かおっしゃって下さい、

私たちの守護天使様、あの乱暴者たちと戦うために

恐ろしい姿を身にまとうことを厭わなかったお方。

私たちはあなたに跪きましょう。

エドガー： ああ、激しく動揺する我が血よ！
震える血管のすべてにかけて、コーディリアの声だ！

(30)

紛れもなく彼女その人！我が感覚はきっと

この乱れた身なり同様になっている。実際、気が狂いそうだ。

コーディリア： あなたがどのようなお方であろうとも、惨めな乙女の友となり、そして出来ることなら、疲れた私たちの先導役となって下さい。

エドガー： 枕代りのハリネズミと共にイラクサの上で眠る

哀れなトムを誰が救ってくれようか。

がり勉の学生がふいごをせつせと動かしている間、

彼女は友だちとセックスをしていた。

そばかすのマブは

赤ら顔の女で、ふしたら女だった。(40)

それでも、聖スウィジンがオベロンを嫉妬深くした——ああ、何たる苦しみ。

アランテ： ああ、お嬢様、可哀そうにうわごとを言って狂っておられます。

コーディリア： それでも、その言葉はちょうど今適正なように思われるわ。

友よ、ご自身より惨めな者に話しかけてください。

そして、狂気の狭間に正気を保てるなら、

どこで哀れな老人を見つけることができるか。

できることなら私たちに知らせてください。彼はこの長い夜に

この荒野を彷徨っているのです。おっしゃって下さい、そのような人を見ましたか？

エドガー：（傍白）彼女はこの夜のあらゆる恐ろしさの中、
父君たる王を探しに来たのだ。ああ、神々よ！

そのような驚くべき敬虔さ、そのような優しさは、

私には残酷なものと映る。

ええ、美しいお方、そのような人は先ほどまでここにいましたが、

彼を探しに来た者たちによって

近隣の小屋に連れて行かれました。でも、正確には

それがどこか分からないのです。

コーデイリア： 彼らに祝福あれ。

彼を探し出しましょう、アランテ。あなたは

私たちが天のご加護にあることを見て取っているのだから。 (行こうとする)

エドガー： ああ、コーディリア！

コーディリア： はっ！ 私の名前を知っているのですか。

エドガー：　かつてあなたがエドガーの名を知っていたように。

エドガー！ (60)

エドガー： エドガーの哀れな残骸です、あなたの蔑みに

見捨てられたなれの果て。

コーディリア： アランテ、私たち起きているのかしら。

エドガー： 父は私の命を求めています、その命を私は

不幸なコーディリアに与える祝福されたひと時を期待して
長らえてきました。神々はその瞬間を与えて下さったのです。

その考えだけが、この気違いじみた服を着て、
大地を床にするよう、私を説き伏せたのです。

むきだしの手足で、季節のあらゆる変化、
正午の痛烈な熱、真夜中の刺すような寒さを耐え忍ぶように。

残飯を食らい、羊飼いたちと飲み、 (70)

風と闘い、百姓たちの物笑いの種となり、

いや、更に惨めなことには、彼らの憐れみの対象となったのです。

アランテ： これほどの不幸に満ちた話がかつてあったでしょうか！

エドガー： だが、このような凋落も、

我が高嶺の花に憧れた以上、当然のことだったのです。というのも、
それは生意気に求められたものでなかったにせよ、無遠慮なものだったからです。

というのも、よくご存じのように、私は恋の炎を密かに燃やし、
墓の中で燃えるランプのように静かに黙っていました。

あなたが私の苦しみに気づき、慎み深い恩寵でもって

秘密を引き出し、それから私の恩赦状に封印をして下さるまで。 (80)

コーディリア： 恩赦状を得たなら、それ以上異議申し立てはできないわ。

エドガー： これ以上どのような異議申し立てができるでしょうか？

そのような虚栄はこれらのぼろ服とは合いません。

繁栄した我が国で、私が裕福なグロスターの跡取りであった時、
あなたは我が愛の公言を黙らせ、このことに関してこれ以上
あなたを悩ませるなと命じた。

それなら、これらむきだしの手足と物乞いの慎ましやかな服から、
愛の言葉はどのように受け止められるのでしょうか？

コーディリア： 断罪された者が赦しの声を聞く時のような。

包囲された町が (90)

援軍の叫び声を聞く時のような。

エドガー： 何と！ これは新手の男をそでにするやり方なのか？

コーディリア： 私の腕に来て、いとおしいお方、男の中の男、
これまで愛を誓った乙女が口にしながら最も熱烈な誓いをお受け取り下さい。

エドガー： これは現実か？

コーディリア： 私の心臓に入っている愛しく死活にかかわるこの流れにかけて、
これらあなたの神聖なぼろ服、剥き出しの美德、
これら惨めな房、これら風変わりな切れ端、
（最も卑しい道化と比べてさえ滑稽だけど）
私にとっては、紫色の君主たちの
最も贅沢な華麗さより高価なものだわ。 (100)

エドガー： 寛大で魅力的な乙女よ、
あなたを作った神々だけがあなたの価値を決めることが出来る！
その最も驚くべき美点は
名声の勝利となるべきもの。後の時代においても、
あなたの輝く手本が舞台を飾り、
世間に完全さを教えることになるでしょう。

コーディリア： 寒くて、疲れたわ。
アランテ、あの藁の上でしばらく休むことにしましょう。
それから、あの哀れで年老いた王を探しに行きましょう。

エドガー： ご覧ください。ここに、彷徨う狂人の必需品である
火打石と火打ち金があります。私が火を打ち出し、
この小屋の下で火をこしらえましょう。 (110)
嵐でびしょぬれになったあなたの服を乾かすのです。その間、横たわって
お休み下さい。
その時、西国の龍¹⁷のように獐猛で不眠の
私が傍らで見守ってあなたの眠りをお守りいたしましょう。
その間、星々には優しい光を放たせ、
天使たちには我がコーディリアの夢に訪れるようにさせましょう。[全員退場]

第3幕第5場

場面：宮殿

コーンウォール、リーガン、私生児、召使いたちが登場。コーンウォールは
グロスターの手紙を持っている。

公爵： この家を離れる前に、復讐してやる。
リーガン、ほら見ろ、我が国に仕掛けられた陰謀だ。
グロスターの筆跡だ。臣下ならびに主人役としての二重の信用を
裏切っている。

17 ヘスベリデス（タ方の娘たち）の林檎の園で黄金の林檎を守っていた、100の頭を持つ茶色い龍ラドーンのこと。

リーガン： それなら、私たちの復讐も二倍になるわ。この手紙は

私たちが今受け取った情報を明らかにしているわ。

彼は今夜王を探しに出かけていると。

でも、その優しい発見者になったのは誰かしら？

公爵： 我らの鷹、見つけるのに素早く、掴むのに獐猛な、

信頼の置ける我らがエドマンドだ。

リーガン： それは高貴な奉仕だったわ。

(10)

ああ、コーンウォール、彼に最も深い信頼を寄せて、

懷の宝石のように身近に置いてちょうだい。

私生児： お考え下さい、あなたに仕えることをこうして悔いさせるような

どれほど辛い運を私が担っているか！（泣く）

この陰謀がなかったならよかったのに、

あるいは私が発見者でなければ。

公爵： エドマンドよ、そなたは余の愛の中に

父を見出すがいい。この瞬間から、

そなたをグロスター伯爵と呼ぼう。だが、

なされるべきまた別の正義がまだ残っている。

(20)

このお役ご免の謀反人を罰することだ。

だが、万一おまえの優しい心根が彼の当然の苦しみを

不憫に思うようなことがあってはならぬし、その光景に耐えられなくても

いけないので、席を外してはくれぬか。

リーガン： （私生児に傍白）低い小森の中の岩屋が

哀悼者に相応しい隠遁所を提供してくれるわ。

私生児： そして、そこで私は慰め手を期待することができるのですね、

奥様？

リーガン： 何が起ころうと、私は知らないわ。

でも、友人の助言よ。 [私生児退場]

公爵： 謀反人を連れて来い。

グロスターが連れて来られる

両手をきつく縛れ。

グロスター： これはどういうことです？

(30)

あなた方は私の客人だ、どうか不当な扱いを止めていただきたい。

公爵： 縛れ、きつく、もっときつく。

リーガン： さあ、謀叛人よ、思い知るがいい――

公爵： 言え、反逆者め、どこに王を送った？

世の命令に反して、昨夜きさまは会っていたな。

グロスター： 杭に縛り付けられては、犬の攻撃に耐えるほかない。

リーガン： 言え、どこに、そしてなぜ、王を隠した？

グロスター： 貴様の残酷な手が彼の可哀そうな両目を

抉り出すのを見たくなかったからだ。それに、貴様の獐猛な妹が

聖油を塗られた王の身体を切り分けるのも。だが、

(40)

素早い翼を持った復讐神がそのような子供たちに襲いかかるのを見てやろう。

公爵： 決して見させはせぬ。お前たち、務めを果たすのだ。

反逆者の両目をえぐり出せ。おい、やれと言うに。

お前が復讐神を見するというなら――

グロスター： 誰か、長生きする気がある者はおらんのか。

助けてくれ――ああ、酷い！ああ、神々よ！（グロスターの両目をえぐり出す）

従者： おやめくたさいませ。そのような非道なふるまいはさせませんぞ。

このような野蛮な行ないを放置するぐらいなら、

殿の身の安全など顧みてはおられぬ。

公爵： 何、悪党め。

従者： 年端もいかぬ頃からお仕えして参りましたが、

(50)

ここは取えてお止めすることこそが、

これまでで一番のご奉公と心得まする。

公爵： 死ぬ、下郎。

従者： わが血が冷たくなる前に、遺恨は晴らしますぞ。（戦う）

リーガン： 助けて――あなた、お怪我なさったの？

グロスター： エドモンド、親を思う心に復讐の火を燃え立たせ、

この恐ろしい芝居の幕を引いてくれ。

リーガン： お黙り、この裏切者、

お前が助けを呼んでいる相手はお前を憎んでいる。お前の裏切りを

密告し、手紙を私たちに見せた張本人だよ。

ほら、お読み、カンブリア公爵の手間を省いておやり。

(60)

よく見えないなら、眼鏡を持ってこさせればよい。

グロスター： わしが馬鹿だった。

さてはエドガーもたばかられたのか。神々よ、お許し下さい。

リーガン： あなた、大丈夫？

公爵： この盲いの悪党をたたき出せ。カンブリアに行きたいと言うなら、

鼻で嗅ぎ分けて行かせるがよい。この下郎は肥だめに放りこんでおけ。

リーガン、血が止まらぬ。腕を貸してくれ。 [グロスターを除いて全員退場]

グロスター： 何も見えない、救いもない！

ついさっきまで、わしの目を忙しく働かせていた

さまざまな事物はどこにいったのか。その目もどこに行ったのか？ (70)
さっきまで花咲く谷間に射し込んで、はるかな坂道を明るく照らし、
広大な地平線にうれしげに沈んでいった
陽の光は死んでしまったのだ。
行手を探るこの両手だけが、わが導き手。
見るかわりに全てを手探りして感じるのだ。
なんと情けない。わが悲しみの深さを探り当てる言葉もない。
生者たちに取り囲まれながら、堅く隔てられている。
生気澁刺とした世界にしながら、暗い墓穴に閉じ込められたも同然。
仕事からも楽しみからも一挙に閉め出され、
もはや春の美しさを見ることもかなわず、 (80)
家族親戚の顔も友の顔も見えない。
だが、この極め付きの悲運に遭っても一つの道だけは残されている。
盲いても死への道は見出せるのだ。
報復せずにおとなしく死ぬべきだろうか？
陛下は同じように亡くなるやもしれない。だめだ、両目から血を流しながら、
哀れみ深い群衆の前に現れて、
血を滴らせる血管の雄弁な言葉で
王様とわしの復讐をしてくれと訴えよう。
目に余る悪事の噂が広まってから、
どこかで断崖から飛び降りて、 (90)
役立たずのこの身を峨々たる巖に叩きつけて死のう。
そうすれば解き放たれた魂は明るい天界へと昇って行き、
果てしもない天球の向こうに、永遠の領域を見るのだ。
そして全身が、太陽さながらの輝かしい一つの目になるのだ。 [退場]

第4幕第1場

岩屋

エドモンドとリーガンが仲睦まじく腰をおろし、音楽を聴いている。

私生児： なぜこのような美にあふれたお方が他人のものだったのか。

誰も私のようにはこの美を尊ぶことができないのに。魅力あふれる王女様、
わが花ざかりの若さを手折り、永遠にその柔らかい両の腕に
抱きしめて、いつまでもやさしく寝かしつけて下さい。
我を忘れて、生きていくのがいやになるほどの

夢が見られるように。

リーガン： だめだめ、私のグロスター、
死ぬというのなら、恍惚とした喜びのあまりの昇天だけにして。
あなたが幸せであり続けるといふ、ただそれだけの条件で、
あなたに歓喜を譲渡いたしますわ。

私生児： これはより大きな愛があるゆえの妬み心。私ならば、 (10)

楽園からさまよい出て、
むかつくような雑草を食べに行ったりはしません。これほどの美味が
ここにあって、わが堅き志操もその力を発揮できないほどなのに。

（傍白）だが、すぐに姉御のほうにも出向いて、
同じ愛の誓いを立ててやらねば——
この私たちの関係こそが不変の愛、いやそのなかでも最良の愛と思し召し下さい。
これで今日の愛の課業は学び終えたことになる。

リーガン： これを記念の品として贈ります。（指輪を渡す）

これ以上、夫から離れているわけにはいきません。

夫の傷が悪化しているのです。致命傷になればいいけど。 (20)

私生児： では、このグロスターの幸せな肖像画を、

（細密画を取り出しながら、手紙を落とす）

彼の宝のことごとくを蔵するあなたの胸に住まわせてやって下さい。（退場）

リーガン： こんな勇敢な若者にこそ、女盛りの美しさが

与えられるのが相応しい——おや、これは？

目の錯覚かしら。（読む）

「報酬がこれほど明らかである以上、それを直視しないのは、
目が見えないのも同じ。それに応えないのは恩知らずというもの。ゴネリルより」
忌々しい！でも好都合でもあるわ。

私の嫉妬心に裏付けができたわけだし、自衛のためには

計略を用いるべきだということは心得ている—— (30)

将校登場

おや、あの関の声は何ごと？ お前はどうしたの、そんなに慌てて飛びこんできて。

将校： 驚くべき急変です。

農民たちが一斉に蜂起いたしました。

指揮する者はありませんが、

宮殿に押し寄せております。

リーガン： 怒りの元は何？

将校： 昨日の祭礼に

近郷近在の土地持ちの百姓たちが寄り集まっていたのですが、

先代のグロスター伯、あなたがたが盲いにして間もないあの老人が
血管からだだら血を流しながら、そこに現われ、
あなた方の非道さと彼らに対する圧政、それに王に対する迫害についても、
公然と非難したのです。それを聞いて百姓たちは憤り、
長く勃発の時を窺っていた内乱が
ついに羽を広げ、あなたがたの最強の兵力をも脅かしております。

リーガン： この臆病者！

勇敢なエドマンドが立ち上げて率いるわれらが軍は、
反乱という怪物を、元の暗い棲み家に
追いつ返してくれるはず。若いグロスター伯の兵力で
その父の弱々しい息が吹き起こした嵐も鎮めてみせます。 [全員退場]

第4幕第2場

原野の場面

エドガー登場

エドガー：最も落ちぶれたみじめな運命の者は

希望を持ってじっと立ち、不安から身を守ることができる。
嘆かわしいなれの果ても最高点からの転落だからであり、
どん底の状態にあればあとは上向きに戻るのみ——誰だ、ここにやって来るのは？

グロスターが老人に手を引かれて登場

父が、みじめな姿で手を引かれて？ 目がお見えにならないのか、
血が滴る眼窩（がんか）から尊い眼球をえぐられてしまったのか！
このような非人間的な行いのことを聞きはしたが、
信じてはいなかった。呪われた女の憤怒が地獄の業火を燃やすにしても
あまりに恐ろしすぎる行為だ。

いつになったら私の悲しみは充分になるのか？ (10)

グロスター： 復讐の女神よ、立ち上がって下さったからには、幸運あれ！

自分の眼球を売った甲斐があるというものだ、もしこの結果が、
虐げられた王に再び幸せをもたらしてくれるなら。

老人： 旦那様、私はずっと旦那様にお仕えしてまいりました。先代の時からお仕えしてもう80年
になります。

グロスター： 行け、もう行ってくれ、友よ、帰るのだ、
お前の慰めももう私には何の役にも立たぬ、
それどころかお前が狙われるかもしれぬ。

老人： その目では道もおわかりになりますまい。

グロスター： 私にはもう行く道なんてない。だからもう目も要らないのだ。

目が見えた時には躓いたものだ。ああ、愛しい我が息子、エドガーよ、
お前は欺かれた父親の怒りの犠牲者だ。 (20)

もし生きて再びこの手でお前に触れることができたなら、

私はこう言うだろう、「眼を取り戻したり」と。

エドガー： 何と、父は私が不当な目に遭ったことに気づいてらっしゃる。

しかしここでわが身を明かせば、父の弱った心は

悲しみと喜びの両極端に引き裂かれて破裂してしまうだろう。

老人： おい、誰だ、そこにいるのは？

エドガー： 哀れなトムにお恵みを。公平にお願いしますぜ、悪鬼を追い払ってくれ。

（傍白） ああ神よ！ まだこの乞食商売を続けて

悲嘆という重荷の下で阿呆を演じなければならぬのか？ (30)

老人： この男は間違い乞食のトムというようです。

グロスター： 先日の嵐の中でそのような男に会った。

そいつを見てると人間が虫けらのように思えたぞ。

その狂人はどこにいる？

老人： ここに、旦那様。

グロスター： お前はもう帰りなさい。もし私のために

ここから一マイルか二マイル先で、ドーヴァーまでの道すがらで

私たちに追いついてくれるなら、長年の忠義心からそうしてくれるなら、

この裸のみじめな男のために何か服を持って来てくれ。

わしはこいつに道案内を頼むつもりだ。

老人： なんと、旦那様、彼は間違いですよ。 (40)

グロスター： 時節が病んでおるのだ、狂人が盲人の手を引くほどにな。

命じたとおりにしてくれ。

老人： 私の持っている一番いい服を持ってまいりましょう。

その結果どうなろうとも。 [退場]

グロスター： おい、裸のお前。

エドガー： 哀れなトムは寒いんだよ——これ以上騙すことはできない、

しかし続けなければ——血を滴らせたあんたの大切な両目に祝福を。

信じておくれ、哀れなトムもこれを見て眼が見えなくなるほど泣いているのさ。

グロスター： ドーヴァーまで行く道を知っているか？

エドガー： 回転木戸も門も、馬道も歩道も知ってるさ。哀れなトムは正気をなくしちゃったけど
ね。正直者がみんな悪鬼から守られますように。 (50)

グロスター： ほら、この財布を受け取れ。わしはこんなみじめな姿になったゆえに、

お前に幸せを分け与えられる、天の采配とはいつもそうしたものだ。

このようにして、高利貸しの蓄えがばらまかれ、

公平な配分が余剰を均して

それぞれが必要を満たすことができるだろう。ドーヴァーを知っているか？

エドガー： 知っているよ、旦那。

グロスター： そこには断崖絶壁がある。その高く、首を傾げるようにそそり立つ崖からは

身も縮むようなはるか眼下に轟き唸る深き海を見下ろすことができる。

わしをその崖の縁まで連れて行ってくれ、

(60)

さすれば私が身にまとっている何かしら高価なもので

お前が耐えている貧しさに報いてやろう。そこからは

もう道案内は要らぬ。

エドガー： 腕を貸しな。哀れなトムが案内してあげるよ。

グロスター： 待て、誰かがやって来るのが聞こえる。

ケントとコーディリアが登場

コーディリア： ああ、悲しい！ あなたの不安は的中しました、あれが王だったのです。

つい今しがた、王に会ったという人と話をしたのですが、

王は猛り狂う海のように荒れ狂い、大声で歌を歌い、

伸び放題の唐草ケマン、畑の雑草、

野バラ、ゴボウ、スマレ、雛菊、ケシの花など、

(70)

私たちの生活を支える穀物畑に生える役にも立たない花を

花冠にして頭にかぶっておいでだったとか。王のところに連れて行って下さい、

王を回復させるために最後の努力を試みたいのです。

そうすればあなたにも天のお恵みがあるでしょう。

ケント： かしこまりました、お嬢様。

なんと、グロスターがここに！——こちらを向いてくれ、可哀そうに眼が見えないのか、

では友人の慰めを聞いておくれ、あなたの姿を見て

我が身の苦境を忘れてしまったが、私はあなたの旧友にして忠実なるケントだ。

グロスター： 何だと、ケントだって？ どこから戻ってきたのだ？

ケント： 追放の宣告の後も、本当に去ったわけではなく、

変装をして捨てられた王につき従っていたのだ。

(80)

先日の嵐の夜に王と一緒にいたのも私だ。

グロスター： 抱擁させてくれ。もし目があったら

喜びの涙を流すところだが、この滴り落ちる血に

涙の代わりをさせてくれ。

コーディリア： 何て悲惨な！

誰に向かって苦情を言えばいいのかしら、そしてどんな言語で？

許して下さい、みじめなお方、その孝心ゆえに
こんなことになってしまつて。そしてそれを引き起こしたのは私。
こうしてあなたの足元に膝まづいてお願い致します、
涙の止まらぬ私の眼をつぶして、あなたと同じ盲目にして下さい。
それで少しはあなたに償いができるなら。

(90)

エドガー：（傍白）これほどに痛ましい時が今までにあったらうか？

グロスター： コーディリア様の声とみえる！ 立って下さい、敬虔な王女様、
盲人の祝福を受け取って下さい。

コーディリア： ああ、私のエドガー、
私の徳行は罪深いものとなつてしまいました。私に味方してくれる人たちに
破滅をもたらしてしまったのです。天も私をお見捨てになったようです。
こうなつてしまったのをご覧になったからには、
あなたが私のことを憎んでしまつても仕方がないわ。

エドガー： ああ、そんな身を切るような話はよして下さい。既に拷問台に
乗せられた心をこれ以上傷つけるのはやめて下さい。

グロスター： ケント、もうその変装で身を隠すのは終いにしてくれないか、
あなたには、高潔な男に相応しい仕事があるのだ。
我々の傷ついた国が、王の受けた非道な扱いと私の扱いに
焚きつけられて、ついに武装したのだ。
足りぬは彼らを率いる指揮官のみ。
それこそあなたの役目なのだ。

(100)

エドガー： 【傍白】勇敢なるブリテン人よ、これでまだ生きる道があるということだ。

ケント： それならば、我々の運にもまだ望みがあるということですね。

さあ、参りましょう、王女様、王に会わせて差し上げましょう。

それから大急ぎでこの軍隊を率いることにします。

お大事に、善良なグロスター公、我々の行いを信じましょう。

グロスター： あなたの正義が成功しますように、公正な正義なのだから。 【全員退場】

第4幕第3場

場面：ゴネリルの宮殿

ゴネリルとお付きの者たちが登場。

ゴネリル： それにしても馬鹿だったわ。グロスターの目をくりぬいただけで
生かしておいたのは。あの男は行く先々で同情を買い、
私たちへの反感を煽っている。エドモンドはきっと
父親の不幸を憐れんで一思いにその命を片づけてあげようと思って出かけたのでしょう。

紳士： いえ、奥様、彼は急ぎの召喚を受けて、
あなた様の妹君の元へと戻っております。

ゴネリル： はっ、そんなの厭だわ、
そんなに急いで戻るとは、愛情の翼があるに違いないわ。オールバニーはどこ？

紳士： 奥においでですが、あれほど人が変わることがあるでしょうか。
農民たちが蜂起しましたと申し上げると、
微笑まれて、グロスター伯の謀反について (10)
知らせると――

ゴネリル： 放っておくがいいわ。
それはあの人の臆病な性分のせいよ。妹の所に戻って、
兵隊召集を急がせ、私が
夫の手に糸巻棒を握らせた¹⁸ ことを知らせてちょうだい。それが終わると、
細心の注意でもって、これらの急ぎの知らせを
若き伯爵のもとにこっそり届けてちょうだい。

使者が登場

使者： 奥様、最も相応しくない報せです。
最近受けた傷がもとで、コーンウォール公が亡くなりました。
その損失の一部の代役を妹君が務められ、
勇敢なエドモンドをその軍の将軍に抜擢なさいました。 (20)

ゴネリル： (傍白) 見方によっては悪くはない。
でも、未亡人となった妹の傍に私のグロスターがいるとなると、
せっかく約束された私たちの愛の収穫が台無しになるかもしれない。
もう一言――旅路を急いでちょうだい。
あの盲目の謀反人に会うことがあれば、
その首を刎ねる者に昇進が与えられるわ。 [全員退場]

第4幕第4場

原野

グロスターとエドガー [登場]

グロスター： その丘の頂にはいつ着くのだ？
エドガー： 今登っているとこですよ。どんなに苦勞していることか。
グロスター： 平らなように思えるが。
エドガー： きつい急坂だ。ほら、海の声が聞こえるでしょう？

18 糸巻きは伝統的に女性の仕事とされてきた。ここはオールバニーに戦場で戦う勇敢さがないというゴネリルの嘲笑。

グロスター： いや、何も。

エドガー： じゃあ、目の痛みで、
他の感覚まで駄目になったんだ。

グロスター： そうかもしれない。

お前、声が変わったみたいだな。言葉遣いも
話の内容も、以前より立派になったような気がする。

エドガー： とんでもない勘違いだ。着てるもの以外は (10)
何一つ変わっちゃいない。

グロスター： 話し方も良くなった気がする。

エドガー： さあ、着きましたよ。これがその場所です。恐ろしくて
目がくらくらする、あんな下の方を見下ろすと。

真ん中あたりを飛んでいる鳥やベニハシ鳥が
カブトムシより小さく見える。崖の中ほどに
ぶら下がって、浜ぜりを掴んでいる奴がいる。危ない商売だな！
漁師たちが浜辺を歩いているが、
子鼠みたいだ。沖に錨を下ろしてる大きな船は
鯨（はしけ）みたいに小さくなって見える。その鯨は浮標（ブイ）のように
小さくてほとんど見えやしない。波のさざめきも、 (20)
こう高くっちゃ聞こえやしない。もう見るのはよそう。
じゃないと、頭ん中がぐらぐらして、その混乱で
真っ逆さまに落っこちかねないや。

グロスター： 私をそこに立たせてくれ。

エドガー： さあ、あと一步で崖っぷちだ。
お月様が照らすものを全てやると言われたって、
前に跳ぶのは御免だね。

グロスター： 手を離せ。

さあ、もう一つ財布をやる。中に入っているのは宝石一つだが、
貧乏人には十分価値のある代物だ。もっと離れろ。
別れの挨拶をして、立ち去る音を聞かせてくれ。 (30)

エドガー： では、旦那、さようなら——こうして父親の絶望を弄ぶのも、
立ち直らせたいとの考えあつてのことなのだ。

グロスター： かくして、全能の神々よ、私はこの世を捨て、
あなた方の御前（みまえ）で我が苦しみを振り落とします。
これ以上この苦しみを荷って、
逆らい難い神々の偉大なるご意志に背かずとも、
蠟燭の芯のように弱々しいこの命の燃え残りは

やがて自ずと消え果てましょう。エドガーが生きているなら、ああ、何卒お恵みを。
さあ、お前、お別れだ。

エドガー： もうここですよ、旦那！ さようなら。

だが、ここがご自身の考え通りの場所だとしたら、 (40)

思っただけで命の宝は奪われかねない。

もう考える力も失っておられるだろう——生きているのか、

死んでいるのか？ おい、聞こえるか？ 何か言ってみろ——

このまま本当に死んでしまうかもしれない——いや、気がつかれた。

どなたです、あんたは？

グロスター： あっちへ行け。死なせてくれ。

エドガー： あんたが蜘蛛の巣か羽根か空気でなければ、

あんな高い所から落っこちちゃ、卵みたいにつぶれているはず。

でも、あんた息をしてる。どっしりした生身の身体で、血も出ていない。

口もきける、怪我一つない。命があるのは奇跡だ。

グロスター：　だが、私は落ちたのか、落ちなかったのか？ (50)

エドガー： 見るも恐ろしいこの白い崖のてっぺんからですよ。

見上げてごらんなさい。甲高い声でさえずるヒバリも、こう高くては

姿を見ることも声を聞くこともできない。さあ、見上げてごらんなさい。

グロスター： ああ、私には目がないのだ。

惨めな人間は死によってその惨めさを終わらせる

恩恵まで奪われているのか。

エドガー： さあ、腕を。

起き上がって。そう、そう、どうです？ 脚の感じは？ さあ、立って。

グロスター： 何ともない、何ともなさすぎる。

エドガー： 崖のてっぺんで、あんたと別れていったのは

何者だったんですか？

グロスター： 貧しい哀れな乞食だ。(60)

エドガー： この下から見ていたら、奴の目は

二つの満月のようで、大きな鼻孔は火を放って息をしてるみたいだった。

ありゃ悪魔か何かだ。運が良かったな、お父つつあん、

人間にはできないことをしてくださる

全能の神々が救ってくれたんだと思いな。

グロスター： 不思議なことだ。これからはどんな苦しみも耐えぬこう、

苦しみが尽きるまで。お前が言った悪鬼を

私は人間だと思っていた。そういえば何度も

「悪魔、悪魔」と言っていた。奴がああ場所に案内したのだ。

エドガー： くよくよせず、気を楽しめ持つことです。だが、誰か来た。 (70)

頭の上に花冠を被ったリアが登場。たくさんの花輪を身につけている。

リア： いや、いや、贖金を造ったからといって、このわしに指一本触れることは出来ぬぞ。わしは王だ。

エドガー： ああ、痛ましい光景だ。

リア： その点では、自然が人工に勝っている。さあ、入隊の手付金だ。あいつの弓の引き方は、まるで牛飼みたいだ——弓の長さいっぱい引け。鼠だ、鼠だ。おーい、静かにしろ。手袋を投げろぞ、巨人が相手でもやってやる。褐色の矛を持った一隊を出せ。おお、鷹のように見事に飛んだ。ど真ん中に命中だ、ど真ん中に命中だ——ヒュー！ 合い言葉を言え。

エドガー： マヨラナの花。 (80)

リア： 通ってよし。

グロスター： あの声には聞き覚えがある。

リア： ふん、ゴネリルか、白い髭（ひげ）など生やしおって。あいつら、犬のようにへつらって言ったものだ。さすが賢王、黒い髭が生える前から白い顎を生やしておられますなあ。わしが「イエス」と言えば「イエス」、「ノー」と言えば「ノー」。そんな「イエス」や「ノー」は異端邪説。雨が降りだし、ずぶ濡れになった時、風が吹いて、寒さに震えた時、鎮まれと命じても雷が鳴り止まなかった時、わしは分かったのだ。やつらの正体を嗅ぎ出した。もうたくさんだ、嘘つきども。おれが王様だと。嘘だ。熱病にもかかる普通の人間だ。 (90)

グロスター： あの声はよく覚えている。王様ではありませんか。

リア： そう、すみからすみまで正真正銘の王だ。わしが睨めば、ほれ、家臣どもはみな震えるであろう。

そこの男の命は助けて使わす。罪状はなんだ。

姦淫だと。死ぬことはない。姦淫の罪で死刑だなどと。

ミソサザイはやりたい放題。小さな金蠅だって、

わしの目の前で平気でつがっておる。大いにまぐわえ。

グロスターの妾の息子は、わしの正室の娘どもよりも父に親切だったぞ。

好色、乱交、大いに結構。なにしろこちらは兵士が足りぬからな。 (100)

グロスター： これまで嘗めてきた悲しみも、このお言葉ほど、深く胸を打つものばかりではなかった。

目が見えたとしたら、かえって責め苦だ。

リア： ほら、あの作り笑いをしているご婦人を見ろ。快楽という言葉を耳にただけで飛び上がり、淫らさからはほど遠い言葉を聞いただけで

耳が穢れたと思うご婦人がだ、信じられるか。

ケナガイタチも腹一杯食べた馬も顔負けの

食欲さで色事三昧だ。上半身はすっかり女だが、腰から下はケンタウロス、神々が続べたまうのは腰帯までだけ。そこから下は化物がうようよ。地獄だ。暗闇だ。底知れぬ硫黄の穴だ。いやだ、いやだ。麝香を一オンスおくれ、薬屋さん。頭を浄めるんだ。ほら、お代はここに。

(111)

グロスター： そのお手に口づけさせて下さい。

リア： その前に拭かせてくれ。死人の臭いがするから。

グロスター： どうです、私がお分かりにはなりませんか。

リア： そなたの目にはおぼえがある。いくらでも悪さをするがいい、盲いたキューピッド。わしは恋に落ちたりはせぬから。この果たし状を読んでくれ。この字を読めばよいのだ。

グロスター： たとえ書いてある文字の一つ一つが太陽だったとしても、私には読めませぬ。

エドガー： こんなことはたとえ噂に耳にしても信じられなかっただろう、哀れなコーディリア。

(120)

あなたの比べるものとてない悲しみの物語に

このような新たな苦しみの一章が付け加わったことを知ったら、
高潔なあなたはどんなさるだろう。

リア： 読め。

グロスター： なんと。目のないこの穴で。

リア： なるほど、そういうことか。顔に目はなく、財布に金なしということだな。目のない穴はからっけつ、財布の中身もからっけつ。しかし、この世の成り行きは見えているだろう。

グロスター： 肌で感じております。

リア： なんだ、気違いか。目がなくても世の成り行きぐらいは分かるものだ。耳で見るのだ。ほら、あそこで判事がこそ泥を叱りつけているのが見えるだろう。二人一緒にふり混ぜれば、最初に落ちて来たほうが、判事であれこそ泥であれ、悪党なのだ。百姓の犬が乞食に吠えかかるのを見たことがあるだろう。

グロスター： はい。

リア： 人間様が犬に追われて逃げていただろう。それこそが大いなる権威の絵姿なのだ。犬でも官職につけば人はおとなしく従うのだ。おいこら、お巡り、その残忍な手をどけろ。なぜその売春婦をむち打つのだ。本当はこの女を抱いて、お前がむち打っているのと同じ罪を犯したくてしかたがないくせに。それいけ、やれいけ、淫売を裁いた判事とはあらかじめ示し合わせているんだからな。

グロスター： なんてしぶといのだろう、おれの卑しい感覚は。まだ壊れないとは。

リア： いいか、高利貸しが詐欺師を縛り首にする。ボロ服の破れ目から小さな罪も露見する。法衣を身につけ、毛皮をまとっていれば、どんな罪でも隠れるのだ。罪と金はつきもの。ほら、お前さんに言ってるんだ。カネは使いよう。罪を咎める連中の口を塞ぐことができる。ガラ

スの義眼を入れて、下劣な策士よろしく、見えないものでも見えているようなふりをするんだ。おい、この長靴を脱がせてくれ、強く、ほらもっと強く。そうだ、そうだ。

グロスター： ああ、意味と無意味が混じりあって。狂気のなかに道理がある。

リア： わしの不運に涙してくれるのなら、この目をやろう。 (150)

お前のことはよく覚えている。名前はグロスターだ。

辛抱せい。われらはこの世に泣きながら生まれてきたのだ。

そうだろう。赤ん坊のわれらはこの世の空気を初めて吸い込んで

泣きわめくのだ。説教してやる。よく聞け。

エドガー： 苦しい胸よ、張り裂けよ。

リア： わしらが生まれる時に泣くのはな、

この世界という道化ばかりの大舞台に放り出されて泣くのだ。

2、3名の紳士登場

紳士： おお、ここにおられた。お連れしろ。陛下、

私どもは娘御のお使いでここに――

リア： 助けはおらんのか。虜にされるのか。まさに生まれつきの運命のなぶりもの。丁重に扱え。身代金は出す。医者を呼べ。ああ、頭の傷は深傷だ。 (161)

紳士： 何事も仰せの通りに。

リア： 介添人もなしか。ひとりぼっちか。かくなる上は、こざっぱりした花婿さんのように華々しく、坊さんの愛人のように満ち足りた顔を紅潮させて、討ち死にだ。わしは王だ、みなさん、分かっておるか。

紳士： あなた様はまさしく国王陛下。私どもは臣下でございます。

リア： 騎兵隊の馬にフェルトの靴を履かせるのは素晴らしい計略だな。一度試してみよう。抜き足、差し足。こうやって娘婿どもに近づいて、さあ今だ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ。

[走って退場]

グロスター： どんなに卑しい身分の者でも、これほど心動かされる光景はあるまい。ましてや王の身にふりかかった不幸なのだから言葉にならない。ところで、そこのお方、あなたは一体。

エドガー： 運命の女神に翻弄された、この上なく哀れな男です。

悲しみの数々を味わいつくして哀れみ深くなりました。どうかお手を。

グロスター： 気高き神々よ。この息を奪い給え。

わが悪天使が私をそそのかして、

寿命が来る前に命の糸を断つ気にさせませんように。

ゴネリルの執事登場

執事： 懸賞金付きの悪党だな。いいところで会えた。

お前の目無しの首は、おれの出世のために

作られたようなものだ。老いぼれの謀反人め、

お前を斬り殺す剣を抜いたぞ。 (180)

グロスター： ではどうかその願ってもない親切な手にそれだけのことをする力をつけてくれ。

執事： 不遜な小百姓め、何ゆえお前は

お触れの出ている裏切り者を助けようとするのか。向こうへ行け。

でないとお前も一緒に殺すぞ。この老人の腕を放せ。

エドガー： これしきのことじゃ放しやせん。

執事： 放すんだ、この下郎め。でないとお前の命はないぞ。

エドガー： 旦那、そこをどいて哀れな百姓を通してくれろ。もしおいらが脅されて命を落とすようなやつだったら、二週間も生きてはいけなかったね。いや、もしあんたがこの老人に近づくなら、あんたの頭とおいらの棍棒とどちらが硬いか試してやらあ。 (190)

執事： 消えろ、肥溜め野郎。

エドガー： ほんじゃ、あんたの歯をもぎとってやる、来い、どこからでも突いて来い。

[彼らは戦う]

執事： 下郎め、やりおったな。ああ、時ならぬ死だ。

エドガー： 貴様のことはよく知っている。悪党ながら奉公人、

欲望が望みうる限り、お前の女主人の悪徳に

忠実なやつだった。

グロスター： おい、死んだのか？

エドガー： さあ、旦那様、座ってお休み下さい。

こいつは文の運び屋。我々の方に

有利に働く何らかの情報が記された紙を

持っているかもしれない——なんだ、これは？ (200)

[執事のポケットから手紙を取り出し、封を開けて読む]

「グロスター公爵エドモンド様

私たちの互いの愛を忘れないで。あなたには私の夫を手にかける機会なんてたくさんあるのよ。夫が征服者として戻ってこようものなら、私は囚人のまま。彼のベッドは私の監獄。その嫌気のさす生ぬるさから私を救いだして、あなたの働きに応じたその場所を確保しなさい。

ゴネリルより」

彼女の主人に対する陰謀、

そして代わりの新しい夫は我が弟か——ここに、この砂の中に

欲望の御使いであるお前を埋めてやる。

他に誰も死刑執行人がいないのだけが嘆かわしいが。 (210)

いづれ、よい時と場所を見て、この手紙を

怪我を負った公爵の眼に触れさせよう。

そうすれば我々の目的に役立つだろう。さあ、お手を。

向こうで太鼓が鳴っているようだ。

さあ、旦那様、私があなただをお味方のところへお連れしますよ。 [全員退場]

第4幕第5場

寝室。リアが長椅子で眠っている。コーディリア、
[医者]、従者たちが傍に立っている。

コーディリア：　ぐっすり眠っていらっしゃるわ。

眠りはお父様の調子の乱れた五感を癒し、
お身体の傷を治すのにいい効果をもたらしてくれるかもしれない。

医者：　我々は可能な限りの医術を施しました。

この深い眠りが我々の目的の最後の総仕上げをしてくれるでしょう。

コーディリア：　ああ、リーガン、ゴネリル、人非人の姉たち、
たとえこのお方があなた方の父親でないとしても、この白髪を見れば
憐れみを搔きたてられてしかるべきなのに。このお顔が
ガタガタ吹きすさぶ嵐に吹きさらすべきお顔だとでも？

私にかみついた敵の犬でさえ、あんな晩だったら (10)

私の家の暖炉にあたらせてやっただろうに——目をお覚ましになった。

話しかけてみてちょうだい。

医者：　お嬢様が話しかけてみて下さい、それが一番です。

コーディリア：　お父様、ご気分はいかがですか？ 陛下、お具合は？

リア：　墓から引きずり出すとはひどい仕打ちだ。

はっ、あの世というのも残酷な世界なのか？

わしは自分の特権を心得ておるぞ。わしがここでも
みじめな人間として扱われるべきだなんて思わんでくれ。

いや、もうそんなのはまっぴらだ。

コーディリア：　私に声をおかけください、陛下。私が誰だかお分かりに？

リア：　あなたは祝福された魂だ。だがわしは火炎の車輪に
縛りつけられておる、そしてこの眼から流れ落ちる涙が
溶けた鉛のようにこの身を焦がすのじゃ。 (20)

コーディリア：　お父様、私がお分かりに？

リア：　そなたは精霊だ、分かっている、どこで死んだのじゃ？

コーディリア：　まだ、まだ意識がさまよってらっしゃる。

医者：　お嬢様、王はまだすっかりお目覚めではありません。もう少ししたら意識もはっきりなさ
るかと。

リア：　わしはどこにいたのじゃ？ 今はどこにおるのじゃ？ 明るい日の光！
頭がひどく混乱してきたぞ。他人がこのような目に遭うのを見たら

憐れみで自分が死にまうだろうに。

これが自分の手かどうかともわからぬ。

コーディリア： ああ、私をご覧になって下さい。

どうか祝福の手を私の上に置いて下さい。

いいえ、跪いたりなどなさらないで。

リア： わしをからかわんでくれ。 (30)

わしは途方もなく愚かな溺愛の老人じゃ。

80を優に超えておる。そなたには率直に言うが、

どうももう知力も完全でないらしい。

コーディリア： もうこれ以上我慢するのはこりごりだわ。神様もご照覧のはず、
私がこれまで不平を口にしたことはなかったことは。

リア： そなたを知っているような気がする、この男のことも。

しかしよく分からん。ここがどこかも

分かっておらんじゃ。全神経を集中させてみても

これらの服のことも、昨夜どこで眠ったのかも

覚えていない——どうかからかわないでくれ—— (40)

わしはしがない人間じゃ、この女性は

私の娘、コーディリアではないか？

コーディリア： ああ、大好きなお父様！

リア： 泣いておるのか？ そうらしい、どうか泣かないでくれ。

わしがそなたに泣く理由を与えたのは分かっておる。それ以来

十字架にはりつけられて卑しめられておるのじゃ。

もしそなたに許してもらえるものならば、許しを請うのじゃが。

しかし分かっておる、

そなたはわしを許せんじゃろう。それゆえそなたの裁きを受け入れたい。

たとえわしに毒を与えようとも飲んで、 (50)

そなたを祝福しながら死ぬのみだ。

コーディリア： ああ、お父様、血を流した心を慰め、
身を切るようなお言葉を使うのはお止め下さい。

リア： 教えてくれ、友よ、わしはどこにおるのじゃ？

紳士： ご自身の王国にですよ、陛下。

リア： からかわんでくれ。

紳士： ご安心下さい、善良なお嬢様、陛下のご乱心の

危険は過ぎました。王を奥にお連れして

さらに落ち着かれるまでそっとしておきましょう。

陛下、新鮮な空気の方へ歩いて下さいますか？

リア： わしを許してくれ、わしは愚かな老人なのじゃ。

[医者たちがリアを連れて出て行く]

コーディリア： 神々がお父様をご回復あらしめんことを――

(60)

しっ、遠くで太鼓の音がする。

ケントは約束を守る男、ああ、軍を率いて

大地から生まれた息子達が天を荒らした時の

ジュピターの怒りの雷よろしく、傷ついたお父様のための戦を闘ってくれる¹⁹。

私も性を変えて、敵軍の血に

真っ赤に染まりたい。けれども闘えるかもしれない、

女性の武器である信心と祈りによって、

お父様の大義名分を援助するのよ。決して過ちを犯さない神々よ、

お父様の味方となって戦い、年老いた哀れな頭が耐えた

嵐のような雷を敵の上に落として下さい。

(70)

君主が血を流せば神々のお姿さえ損なわれます。

これは神々ご自身の大義のため、ですからどうか救援軍を送り

ご自身のために復讐をし、傷つけられた王に正当な権利を回復させて下さい。

[全員退場]

第5幕第1場

場面：野営

ゴネリルとお付きの者たちが登場。

ゴネリル： 妹の軍勢は既に到着している。

それに妹自身も夜までには着くと

言っていたわ。前に言いつけておいたけど、

私の天幕^{テント}で妹をもてなす宴会の準備は

できている？

お付きの者： はい、できております。

ゴネリル： だが、私の毒殺者よ、お前は宴会の最後を飾る盃を

準備しないとイケないわ。歓喜が高まった時、

ラッパが鳴って、フルートの音が応えると、

それがあの傲慢な妹に致命的な一飲みを与える

きっかけになるのよ。それからもし我が軍が勝てば、

(10)

勝利より愛しいエドモンドが我がものとなる。

19 19 タイタン族の反乱を圧するジュピターの力への言及。

でも、もし敗北や死が私にもたらされるとしても、
 この世に幸せな恋敵を誰一人残して来なかったと考えれば、
 我が亡霊も慰められるでしょうね。 [トランペットの吹奏]
 ほら、彼女が来たわ。 [兩人退場]

第5幕第2場

私生児が天幕^{テント}の中で登場。

私生児： 姉と妹のどちらにも愛を誓ってきたが、
 お互いに疑心暗鬼で、蝮に噛まれたやつが
 蝮を見るように見交わしている。二人とも生き残るとしたら、
 どちらも自分のものにするなどできない。どちらに狙いを定めるべきか？
 コーンウォールは死に、リーガンの独り寝のベッドは
 幸運の女神が俺に投げてよこしてくれたように思える。だが既に
 俺は彼女を楽しんだ。それに栄光に輝くゴネリルは
 妹と等しい魅力でもって、あの愛しい変化をもたらししてくれるし、
 まだ味わわれていない美しさがある。戦の間は
 彼女の夫の権威を利用し、それから (10)
 奴のベッドと玉座を同時に篡奪することにしよう。

将校たちが登場。

我が信頼すべき偵察兵どもよ、よく戻った。敵の兵力と陣形を
 探って来たか？

将校： はい。驚いたことには、
 あの追放されたケントが戻っており、先頭におりました。
 あなた様の兄上のエドガーは後方にいました。老グロスターは、
 人の心を動かす見世物さながら、手を引かれて兵士たちの間を回り、
 その力強い弁舌、そして、彼が遭った不当さがそれ以上に訴えかけて、
 奴ら田舎者どもの精神を鼓舞しておりました。近づく夜明けと共に、
 戦いを挑んでくることでしょう。 (20)

私生児： 歓迎すべき知らせを持って来てくれた。各自、持ち場につけ。
 隊列をよく整えろ。守りを固めろ。
 今晚休むがいい、朝に俺たちは
 太陽が昇るに相応しい光景を作ってくれようぞ。 [全員退場]

第5幕第3場

場面：野営の近くの谷

エドガーとグロスター登場。

エドガー： さあ、あんた、この木の陰で

休んで、正しい方が勝つよう祈ってなさい。

また戻って来られたら、

嬉しい知らせを持って来るよ。 [退場]

グロスター： 有難う、人懐っこい方。

その良き大義に相応しい幸運がそなたを待ち受けてくれますように。

出撃の合図。それからグロスターが口を開く。

戦いが激しくなった。至る所で戦闘が繰り広げられている。

血糊のついた戦が血管の悉くに血を流させている。

太鼓とラッパの音が大きく鳴り響き、殺戮の唸り声をかき消している。

かつて戦の先頭に立ち、命の危険がある場所にいる兵士たちのもとへ

駆けつけたあのグロスターは今どこにいるのか？ (10)

ここ人気のない木陰で羊飼いのようにひっそりと、

怠惰に、武器も取らず、戦いの音に耳を澄ませているとは。

だが、負傷した軍馬は、たとえ盲目の不具となろうとも、

戦争のガチャガチャという音が厩まで響くのを耳にすれば、

怒りのつばきで口を泡立てながら、地団太を踏んで土を跳ね上げ、

自由を求めて綱を力強く引っ張る。

盲目の小蛇よ、もう避難所は捨てて、見通しのいい野に

出るのだ。戦場がここに移って

お前を潰し、あの世へと送るかもしれぬ——さあ、ここに横になって、

地面を掘るがいい。それはもぐらに相応しい仕事だがな。 (20)

ああ、暗い絶望よ！ エドガーよ、いつになれば戻って来てわしを赦し、

わしを墓に送ってくれるのか？ (退却の音)

はっ、退却の音だ。国王は負けたのか、それとも勝ったのか？

再びエドガーが登場。血を流している。

エドガー： 逃げるんだ、ご老人。手を貸しな。さあ！

リア王は負けた。王とその娘は捕虜になった。

神々よ、この人だけが、この実にひどい破滅から

唯一救い得るものだ。さあ、手を貸しな。

グロスター： いやだ。野垂れ死にならここでもできる。

エドガー： えっ？ またろくでもないことを考えてるのか？ 人間、辛抱しなくちゃ、

あの世へ行くのは、この世に生まれて来るのと同じでそう易々とはいかないよ。 (30)
グロスター： それもまた真実。 [兩人退場]

第5幕第4場

ファンファーレの音。勝利したオールバニー公、ゴネリル、リーガン、私生児、
捕虜となったリア王、ケント伯、コーディリア登場。

オールバニー： 十分征服した。戦いが済んだ今、
残酷さはもう必要ではない。近衛隊長よ、
更に命じるまで王家の囚人たちをよく扱え。
我が意に沿うように。

ゴネリル： (隊長に傍白) お聞き、夫の意に沿うようにはなくて、
あなたの命が長らえられるように、囚人たちをあの世に送りなさい。
私たちの王国は奴らが死なないと、
確かな地盤を持ちえない。奴らが地面に埋もれれば、
私たちの玉座はびくともしないものとなる。死んだという知らせを聞かせてちょうだい。

隊長： 仰せに従います。 (10)

私生児： 公爵、この惨めな王には
死刑の宣告をするのが最も安全かと思います。
高齢もさることながら、王の称号には人を魅了する力があります。
平民どもが再び王の側に心を移しかねません。
それだけは避けねば――

オールバニー： 失礼だが、伯爵、
あなたはこの戦で私の部下にすぎず、
兄弟とはみなしていない。

リーガン： その資格は私から授けたいと思います。
この人が私たちの軍を指揮したことをお忘れになって？
私たちの地位と身分の全権を委ねられていたのでは？
その権威こそ、あなたの兄弟に十分資するでしょうし、
そう呼ばれて当然でしょう。 (20)

ゴネリル： そう熱くならないで。
この人は、あなたが付け加えなくても、
抜きんでた資質を十分に持っているわ。

エドガーが変装して登場。

オールバニー： 何者だ？

エドガー： 失礼ながら、公爵、王族であり征服者である

あなた様をお止めすることになろうかと存じます。あなたは勝利なさいましたが、この見知らぬ者が伝えますことに耳をお貸し下さい。

勝利以上にあなた様に関わることでございます。

私はそこにいる將軍を謀叛の廉で告発いたします。

グロスターの名を篡奪したエドモンド卿の、 (30)

あなたの命と名誉に対する最も邪悪な行いを。

この告発は真でございます。やつれ果てているように見えようとも、

私は申し立てておりますことを一騎打ちで証明する

勇者となることができます。

もしエドモンドが自らの言い分の正しさを剣の力で証明する気があるのなら。

私生児： このエドモンド、その気になれば何でもやってのけます。殿、どうか

すみやかに、その挑戦者とやらと対戦する場所を

ご指定下さい。

そいつを損なわれたわが名声の犠牲に捧げてやります。

いいかね、君、傷つけられた名誉というやつは気難がり屋で (40)

せっちななものなのだよ。

オールバニー： 今すぐ、われらの天幕の前で全軍立ち合いのもと、果たし合うがよい。

布告官に決闘の告知をさせよ。

エドガー： 挑戦者に成り代わってお礼を申し上げます。

本人はラッパが吹き鳴らされるのを待っていることでしょう。

オールバニー： 案内せよ。

[リア、ケント、コーディリアは警護する衛士と共に残り、その他は退場]

リア： おお、ケント、コーディリア！

お前たちだけでは悪いことをした。

公正なる神々の計らいでお前たちは、

この歳で運命に辱められ惨めに落ちぶれ、

鎖につながれ足枷を付けられたわしのこのありさまを見るに至ったのだ。 (50)

お前たちが、ただこのわしの嘆きを高みから見物するだけで

ともに苦しんでいるのでなければ、さぞよかったろうに！

コーディリア： そんなことをおっしゃると、ますます辛うございます。

リア： ケント、お前はわしのために兵を率いて戦い、

命と運を、(わしの記憶では) お前を追放した主人のために

危険に晒したのだ。

ケント： どうかご命令に背いたことをお許し下さい。

追放に処せられたにもかかわらず、身をやつしておそばに留まり、

陛下の運勢の浮き沈みを見守り、御身をお護りしました。

口の悪い無礼なケイアスという男に目をかけてくださいましたね。 (60)

そして、ケイアスも陛下のためにいささかの働きをした。

リア： わしの忠実なケイアスか。あいつも失ってしまった。(泣く)

口は悪いが正直なやつだった。

ケント： 私がそのケイアスだったのです。

陛下にお仕えするために粗末な身なりをしていたのです。

リア： わしのケイアスもそんな身なりだった！ お前がわしの忠実なケイアスだったのか。

もうよい、もうよい！

コーディリア： ああ、気を失われた！ お顔も真っ青、

助けて、ケント――

リア： だめだ、泣いているところなんぞ見せぬぞ、

やつらが滅びるのを見るまでは。監視役よ、監獄に

案内せい。さあ、ケント、コーディリア、おいで。 (70)

わしらは籠の鳥のように二人だけで座っていよう、

お前が祝福を求めたら、跪いて

お前に許しを乞おう。そのようにわしらは暮らし、

祈り、歌い、昔話を語り、金ぴかの蝶々を

見て笑おう。おべっか使いどもが

宮廷の噂話をするのを聞いて、やつらと一緒に

誰が負けて、誰が勝ったか、誰が幅を利かせ、誰が落ち目なのかを語り合おう。

天の密偵さながら、

世の不思議をすべて見通しているようなふりをしよう。

コーディリア： このような生贄を捧げられたら、 (80)

神々の方から香を手向けることでしょう。

リア： これからもずっと一緒にいてくれるか？

わしらを引き離すのは、天から松明をもたらす者だけだ。

ともに地獄の悪意を根負けさせ、

死んだ後は世界の不思議として語り草になろう。さあ行こう。

[衛士とともに全員退場]

第5幕第5場

ラッパの吹奏。天幕の前にオールバニー、ゴネリル、リーガン、衛士たち、従者たち登場。

ゴネリルだけは他と離れて、衛士長と話しながら登場する。

ゴネリル： ほら、この金はお前に。いいかい、お前に任せた捕虜たちの生死にかかわる
さっきの命令だけど、すぐに実行するんだよ。今夜の
宴会で、あいつらの死の報せを聞いて
乾杯できるように。

衛士長： ご命令通りにいたします。 [退場]

（オールバニー、ゴネリル、リーガン、席に着く）

オールバニー： さあ、グロスター伯、頼みはお前自身の勇猛果敢さだけだぞ。

お前の兵士たちは一人残らず、わしの名で集められた者たちであり、
わしの名で解散した。さあ、

トランペットを吹き鳴らせ。布告官にこれを読み上げさせよ。

(9)

（布告官、読む）

「わが軍の兵士の中に、階級は問わず、グロスター伯を名乗るエドマンドに対して幾重にも裏
切りを重ねた謀反人たることを告発せんとする者があれば、トランペットが三度吹き鳴らさ
れる間に申し出よ。エドマンドは受けて立つぞ（舞台裏からトランペットの吹奏）。もう一
度（トランペットの吹奏）、もう一度（トランペットの吹奏）。

武装したエドガー、登場

オールバニー： エドガーか！

私生児： 何と！ わが兄上か！

俺が恐れていたのはこの対戦者だけだ。

この胸の内で罪の意識がやつの味方をしている。

だが、良心よ、お前をどうしたものか？

良心よ、貴様の奴隷たるなまくらな嫡男野郎どもをせいぜい恐れさせるがいい。

だが、俺は生まれつきの放蕩者だし、今もそうだ。

エドガー： 殿下、ひとこと言わせて下さい。われらの身柄を

(20)

殿下にお預けする前に、この書付をお受け取り下さい。

決闘の勝敗がいずれに決するとしても、これをお読みくだされば、

私の告発が正しかったことがお分かりいただけるでしょう。

オールバニー： 後で読ませてもらおう。

エドガー： さあ、エドマンド、剣を抜け。

もし俺の言葉が、誇りある貴族の心を傷つけたというなら、

自らの腕によって汚名をそそぐがよい。こちらの殿下や

貴婦人たちや王軍の兵士たちの目の前で、

俺はお前に謀反人という汚れた呼び名で烙印を捺す。

神々と父と兄を裏切り、

(30)

あまつさえお前の味方であるこちらの殿下まで裏切ったのだ。

もしお前がグロスター伯に相応しい雄々しさの火花を分け持っているというなら、汚名をそそぐがいい。あるいはグロスター伯に相応しい勇気を持っているなら、潔く挑戦を受けて立つがいい。

私生児： エドガーは、
打ち負かされて尻尾を巻いて逃げ出したエドガーは、勝利者に立ち向かう勇気があるのか？
俺はお前とその全軍をこの戦場から叩き出してやった。
お前はすべての賭け金を失ったのに、また
ちっぽけな賭け金を持って来て、二度目の勝負を
挑もうというのか。

エドガー： 半分しか血がつながっていない弟、
父の罪の子として生まれ、父を罰する^{しもと}筈となった者よ、 (40)
お前を生み出した暗く邪な場所^{よこしま}のおかげで
父は両の目を失った。不身持な母親から
お前はその邪悪さを受け継いだが、グロスターの血筋を
受け継いでいる以上、おれと剣を交える資格はある。

私生児： お前は母親の敬虔さにご満悦だが、そんなもの、
俺は軽蔑する。お前の母親は貞潔だから、
グロスターの息子に他ならぬことは確かだが、
俺のは貞潔さを蔑むような女だから、
もっと高貴な血筋を受け継いだご落胤かもしれん。
ひょっとしたらどこかの国王が本当の父親かもしれないんだ。 (50)
生まれの不確かさはともかくとして、
たまたま俺の父親になったやつが何者なのか
俺は知らん。俺は俺だというだけで十分だ。
このひとつのことだけが確実なのだ。俺には
勇敢な魂が備わっている。よく覚えておけ。
トランペットを鳴らせ。（戦って、私生児が倒れる）

ゴネリルとリーガン： あの人を助けて、助けて。

ゴネリル： これは策略よ、グロスター。
戦いには勝ったのですから、打ち負かした敵と
戦う義務はなかったのよ。負けたのではなく、 (60)
欺かれ、裏切られただけ。

オールバニー： 黙れ、さもなければ
この書付で口を塞いでやる。待て、
いかなる汚名でも足りぬ悪女め、その目で自分の悪事を読むがいい。
破ってはいかん。覚えがあるらしいな。

ゴネリル：　だとしても、誰に咎められるというの？

法律は私のもの、あなたのものじゃない。

オールバニー：　恐ろしいやつ！　おい、お前にも覚えがあるのだな。

私生児：　覚えがあることをわざわざ聞くまでもない。

つまらぬ尋問に答えるのは息がもったいない。 (70)

オールバニー：　これで得心がいった。勇敢なエドガーよ、お前の権利が勝利を収めたのだ。

（エドガーに向かって）一緒に来てくれ。お前の父に話を聞かねば。

〔オールバニーとエドガー退場〕

リーガン：　皆の者、手を貸して、高貴な方の命を救ってちょうだい。

この尊い血が流れ出るのを塞いでくれる技を持つ者には

私の王国を半分をくれてやるわ。

私生児：　やぶ医者はおめんだ、

無駄な治療でこれ以上俺を苦しめないでくれ。

こう深く刺されてはもう手遅れだ、嫡子が

最後には正当な権利を得たのだ。

リーガン：　自然の女神の誉が死んでしまう。

ゴネリル：　向こうへお行き、一分でも無駄にできないのだから、

出しゃばった悲しみの言葉で私たちの邪魔をしないでちょうだい。 (80)

リーガン：　お姉様は私の恋敵だと公言するおつもり？

ゴネリル：　まあ、私たちの愛が秘密のものだったとでも？

私の持つ美と彼の持つ武勇が存在しながら

お互いに愛が芽生えないなんてありえるかしら？　そうだったら

自然の女神の過ちになるでしょう。この完全無欠の写本を御覧なさい、

この若者の物語には、一頁たりとも誤りはないじゃないの、

リーガンの腕に屈したと書かれている箇所以外はね。

それも臣下としての服従からのことで、愛情ではないわ、

衰えた美に懇願されて情けをかけただけよ。

リーガン：　ゴネリルがこれを書いた時、懇願したのは誰よ？ (90)

（手紙を投げつける）

人前にさらしてあなたの軍の余興にするといいわ。

この魅力的な若者と私がそうしたようにね。

そう、あれは東屋で、彼が熱い熱い愛の恍惚をささやき、

私の胸元であえぎながら「無比無類のリーガン、

ゴネリルとあなたは本当に姉妹なのか！」と叫んだ時だったわ。

ゴネリル：　死ぬがいい、キルケーのような女、あなたの呪術ももう終わり、

私の目の前で息果てるのよ。さあ、見せて頂こうかしら、

凝固した血液と死に至る痙攣性の苦悶が

その高慢な美にいかに対応しいかを。

死んでお黙りなさい、お前は昨夜私の天幕^{テント}で

酒宴の盃にまぎれて破滅の杯を飲んだのよ。

何よ、笑ってるの？ お前にとっては死は遊びとでもいうの、

それとも効果観面の毒杯のせいで狂ってしまったのかしら？

リーガン： お姉様の復讐は、私には及ばなかったようね、

私のグロスターの愛には及ばないのとおんなじで。猜疑心が、

お姉様の低能な悪意から身を守るように、

あなた自身の酒宴であなたに毒を盛るように心得させたのよ。

ゴネリル：

何ですって！

私生児： もうやめてくれ、王妃たちよ、時宜を得ない諍いを起こすのは。

あなた方はお二人とも私の愛に値したし、私の愛を所有したのだ、

こっちに来てくれ、兵士たち、私を中に運んでくれ。

そして公爵に私の最期に恵みを与えてもらえるよう取り計らってくれ。

それからエドガーよ、あなたの誇り高い征服を私は許そう。

死にかけの私を王妃二人が取り合って争ってくれるなら

死ぬのも本望だ。

[全員退場]

(100)

(110)

第5幕第6場

牢獄の場面

リアがコーディリアの膝に頭を乗せて眠っている

コーディリア： みじめな王よ、一体どのような苦しみに耐えてきたからなのかしら、

鎖につながれながらもそのようにぐっすりと眠り続けていられるのは？

お父様の善天使が、強奪された精神に魔力をかけて

幻想にすぎない自由を見せているのね。藁ぶき屋根の小屋には

かつて平穏が宿っていた、そしてお父様も乞食のような寝床に

横たわるからには、乞食のように呑気な思いだけを持つべきだわ。

ああ、エドガー、あなたのことを思い出すわ、

こうして皆の運命が難破してしまった中、どんな運命があなたを捕まえたのか

知る由もないけれど、きっとあなたもみじめな思いをしているに違いないわ、

だってコーディリアがあなたを大切に思っているから。ああ、神よ！

急な陰鬱さに圧倒されそう、そして死の姿が

この場所に広がるみたい——えっ！ あの人たちは何？

(10)

衛士長と将校たちが紐を持って登場

衛士長： さあ、お前達、行くんだ、既に手付金は支払われた、
最良の報酬がすぐに手に入るぞ。

リア： 突撃だ、左右の陣に突撃だ、奴らの軍の最後の翼（よく）がそこにいるぞ。
押せ、押せ、闘いを、勝利は我らのものだ。
奴らの軍は破れた、オールバニーと一緒に引いてる、引いてるぞ。
誰が私の手を引きとめるのか？——ああ、眠りめ、騙しやがったな、
わしは今まさに追撃するところだったのに。
目覚めてみればここでは囚人だ——下郎ども、どういうつもりだ？
俺を殺すつもりじゃないだろうな？

(20)

コーディリア： 天と地よ、助け給え！
親切な皆さん、あなた方の魂のために、そして神のために。

将校： 泣いても無駄だ、ご婦人、金と昇進に抗って訴えることはできないのだ。
さあ、お前たち、縄をかける準備をしろ。

コーディリア： そうはさせません。
あなたも姿かたちは人間なのですから、もしどんな祈りも
その魂に触れて哀れな王の命を助ける気にさせないなら、
もしあなたが大切にしているものが何かあるのなら、
それにかけて、どうか私を先に処分して下さい。

衛士長： 要求に応じてやれ、彼女を先に処分しろ。

(30)

リア： 去れ、地獄の番犬ども、神にかけて彼女を見逃すよう命じるぞ。
あれは私のコーディリアなのだ、私の真実敬虔な娘なのだ。
憐れみはないと？——では老人の復讐を受けるがいい。

リアは長柄の槍をもぎ取り、彼らのうちの二人を打つ。残りの敵が
コーディリアから離れてリアに向き直る。そこにエドガーとオールバニーが登場。

エドガー： 死ね！地獄へ落ちろ！お前達ハゲタカよ、その不敬な手を止めろ、
さもなくば、自分で与えるよりも早い死を受け取ることになるぞ。

衛士長： 誰の命令だ？

エドガー： お前らの主人、公爵の御前だぞ。

オールバニー： 衛兵たちよ、あれらの残酷の手先どもを捕えよ。

コーディリア： 私のエドガー、ああ！

エドガー： 愛しいコーディリアよ、我々が来るのが間一髪間に合って幸運だった。
神は我々の受難を推し量られた。

(40)

業火はもう過ぎた、我々はこれから末永く輝けるに違いない。

紳士： 殿下、ご覧下さい、勇敢な王がここに
敵のうち二人を殺しているのを。

リア： わしは敵を倒してこなかったか、友よ？
この眼で勝利の日を見てきたぞ、敵にかみつく幅広の剣で
わしは奴らを追い散らすことだってできた。今は年老いて、
不運の数々が私を摩耗してしまったが。息切れしてしまったぞ！
ふん、本当に息切れして、疲れてしまったぞ。

オールバニー： 老ケントをここへ呼べ。そしてエドガー、
お前の父もここへ連れて来るがいい、近くにいてと言ったな。 [エドガー退場]
グロスターは少なくとも我々の一連の出来事の
耳証人となってくれるだろう。 (50)

ケントが連れて来られる

リア： お前は誰だ？
わしの眼はよく見えてはおらんが、それでもすぐに分かるぞ。
ああ、オールバニー！ ああ、わしらがお前の捕虜になったから
わしらの上に死が訪れるのを見に来たのだな。
どうしてそれを遅らせるのだ？——それとも、殺す前に我々を拷問にかけるのが
あなた様のご意向なのか？ そうなのか？
なぜ老ケントと私が、暴君の迫害を耐えた中でも最も
タフな二人が、ここでこんな目に遭うのだ——だが、私のコーディリア、
ああ、可哀そうなコーディリアがここに、ああ、憐れみを！—— (60)

オールバニー： 鎖を解いてやれ——ああ傷つけられた王よ、
運命の車輪は今や一回りして
あなたと墓の間に立って祝福を与えているのです。

リア： 人非人の公爵よ、こうやって我々をなだめて
希望という阿呆の楽園に引き戻すため、そして我々の悲運をもっと惨めにするために
あなたはやって来たのか？ 向こうへ行ってくれ、我々は
もう悲運とは顔なじみになりすぎて、今更
嘘つきの希望に騙されはしない。もう希望は持たないのだ。

オールバニー： お話すべき、驚異に満ちた話があるのです、
簡単には信じてもらえないような話ですが、 (70)
この私の傷つけられた頭にかけて、真実です。

ケント： それはどのようなもののでしょうか？

オールバニー： 高貴なエドガーが
あの戦の後、エドマンド卿を謀反の廉で告発し、

その正しさを証明しようとして一騎打ちを挑んだのだが、
神々は征服によって彼の告発を認めた。

ちょうど今、私はあの謀反人が瀕死の傷を負った場所から来たのだ。

リア： それで、この話の先は？

オールバニー： 二人が戦った時に

エドガー卿が私の手にこの書付を渡した。

地獄の記録に見ることが出来るのよりも、

どす黒い謀反と欲望の目録だった。

(80)

これです、聖なる王よ、ゴネリルの筆跡を

ご覧あれ。娘の中で最悪の者だが、

それ以上に邪悪な妻だ。

コーディリア： 彼らの罪以上のものなどあり得るでしょうか？

父親をないがしろにする者ならどんな悪事でも仕出かします。

オールバニー： リアよ、その時以来、我が傷はそなたのものと同じになった。

あなたと私自身の損害を償わせることにする。

ケント： 何と？

コーディリア： おっしゃって下さい、私には天から降りてくる神の

魅力的な声を聞いたように思えるわ。

オールバニー： エドマンドが起こした軍勢を私は解散させた。

(90)

残っている者たちは我が指揮下にある。

あなたの齢を元気づけ、あなたが被った野蛮な不当を

癒すことのできる慰みは何でも差し上げます。

あなたにあなたの王国をお返しします。

あなたご自身が結婚において我々に授けた領地以外は。

ケント： 王よ、今の言葉をお聞きになられましたか？

コーディリア： では、神々がおられるのだわ、美德は神々の配慮だから。

リア： こんなことがあり得ようか？

天球たちよ、その運行を停めるがいい。太陽よ、止まれ。

風よ、静まれ。海と泉よ、休むがいい。

(100)

あらゆる自然よ、悉く静止して、この変化を聴くがいい。

我がケイアスである我がケントはどこにいる？

ケント： はい、ここに。

リア： はて、そなたの若かりし時を思い出させる報せを聞いたぞ。

はっ！ そなたも聞いたか、それとも、靈感を与える神々が

わしにだけ囁いたのか？ 老齡のリアは

再び王になるぞ。

ケント： 神のように力を持った君主がそうおっしゃいました。

リア： では、コーディリアは女王だ。肝に銘ずるがいい。

コーディリアを女王とする。風たちよ、その音を受け取り、

その素晴らしい翼に乗せて天まで運ぶがいい。

(110)

コーディリアは女王だ。

エドガーとグロスター伯爵が再び登場する。

オールバニー： 王よ、ご覧下さい。敬虔なエドガーがやって来ます、

盲目となったその父親の手を引きながら。ああ、我が主君！

彼の不思議な物語はあなたの暇を紛らわすに足ることでしょう。

彼が何をなし、何を被ったか、あなたのために

そして、美しいコーディリアのために。

グロスター： 我が主君はいずこに？ 王の膝元に連れて行って、挨拶をさせてくれ。

彼の第二の帝国の誕生だ。我が愛しのエドガーが

彼自身の身と共に、王の祝福すべき復古を知らせてくれた。

リア： 光が見えない哀れな我がグロスターよ。

(120)

グロスター： ああ、再び王笏を持たれたその御手にどうか口づけさせて下さい！

リア： 待て、そなたは君主を誤っている。ここに跪け。

コーディリアが余の権力を握っておる。コーディリアは女王だ。

言え、あれは辛い目に耐えてきた高貴なエドガーではないか？

グロスター： 敬虔なる我が息子、失ったこの両目以上に大事なものでございます。

リア： わしも彼を不当に扱った。だが、これが公平な埋め合わせだ。

エドガー： 我が主君よ、歓迎されない報せを述べますことをお赦し下さい。

エドモンドが——でも、些細なことなのですが——命果てました。

よりあなた様の心を傷つけるだろう報せ、あなたに対して横柄な娘たち

ゴネリルと傲慢なリーガンは、二人とも死にました。

(130)

どちらも、宴で相手が用意した毒によって。

死にながら、二人は、そう告白いたしました。

コーディリア： ああ、邪悪な人生に定められた致命的な最期！

リア： 恩知らずなやつらであったが、それでも我が心は

二人の惨めな凋落に対する情の苦しみを感じざるを得ない——

だが、エドガーよ、わしはそなたの喜びをあまりにも長く先送りにしておる。

そなたは苦悩したコーディリアに仕えてくれた。王冠を戴いた彼女を受け取るのだ。

その額には帝国を率いる者の美質が新たに花を開かせつつある。

さあ、グロスターよ、そなたにはここで父親の権利がある。

助けになるそなたの手で二人の頭上に祝福をふんだんに浴びせるがよい。

(140)

ケント： 年老いたケントも心からの願いを投げかけます。

エドガー： 神々もあなたも、私になしてきたことに

惜しみなく報いてくれています。この贈り物の有難さは言葉に尽くせません。

コーディリア： この私も過去のあらゆる辛さを補って余りある

我が身を持ち、赤面しています。

グロスター： さあ、優しい神々よ、このグロスターの荷を降ろして下さい。

リア： いや、グロスターよ、そちにはまだ生きてやるべき仕事がある。

そなたとケント、それにわしは、どこか涼しげなる伏せ屋に隠居して、
残された短い余生を静かに過ごすこととしよう。

かつての我々の運命の変転を穏やかに回顧しながら。

(150)

この素晴らしい一組の男女の繁栄した統治に

元気をもらいながら。こうして、我々の残された日々を

平坦な思考の成り行きの中で過ぎて行かせよう。

今の時を楽しみ、最後の時を恐れるではない。

エドガー： うなだれていた我々の国は今や首をまっすぐ伸ばしている。

平和はそのうらかな翼を広げて、たくさんの花を咲かせている。

神々しいコーディリアよ、神々は悉くご覧になっておられる。

私がどれほど王国よりそなたの愛を好むか！

そなたの聡明なる手本は世間に確信させることであろう。

どのような運命の嵐が定められていようとも、

(160)

最後には真実と美徳が成功を収めるのだと。 [全員退場]

納め口上

以下はエリザベス・バリーによって語られたもの。

不実、すなわち、この時代に君臨している罪が

舞台上の誠実な恋人たちに我慢することなんてほとんどないでしょう。

観客の皆様もお芝居の中でさえそのような不実なしでは気が済まないのも、
詩人たちは自己を防衛するために誠実な恋人たちを殺すのです。

それでも、私は一つの大胆な証明を示すことに決めました。

貞節を三時間よりも長く生き延びさせることができると。

おそらく皆様は、そのような聖女が舞台上で作り上げられている間、

私たちが実際にその生き方を続けるのではないかと思うでしょう。

時々、我々は脅威となります——でも、我々の美徳は、

真実を申せば、皆様の平土間での空威張りと同じようなものです。

(10)

というのも、(別に媚びて申しているのでもないのですが、)

私たちが舞台を降りて、皆様が劇場を後にする時、

私たちがそれほどはにかみ屋であったり、皆様がそれほど勇敢であったりすることはないでしょうから。

私たちは女子修道院の話をしています——でも、偽りのないところを申し上げれば、修道院で我々を見るとすれば、

我々をこき下ろす平土間のお客様たちが

詩人たちを悩ませるという不名誉な仕事を恥じて蜂起し、

タンジール²⁰でその砦の領主を袋叩きにする様子に出くわしてもいいくらいです。

そう、あなた方は皆、平土間でどなることに適していらっしゃるのです。

このお芝居を復活させた作者は、あなた方の絶対的な力が (20)

彼のそのような役割を罵ることを慎んで認めます。

しかし、この意匠を初めて

案出したその巨大な手の、あまりにも多くの天才のひらめきが

依然として輝いていますので、偉大なシェイクスピアのために、彼は大胆にこう申し上げます。

もしあなた方が今日ご覧になったものを何一つ好まれないとすれば、

あなた方がこのお芝居を非難するのではなく、このお芝居があなた方の判断を非難するのであると。

20 1662年以来モロッコ北部のタンジールを支配していたイギリス軍と1679年から1681年にかけてタンジールを包囲したムーア人との間で起きた戦争についての時事的言及。その後、1684年にイギリスはタンジールを放棄することになる。これらの詩行の意味は、女優たちはタンジールの勇敢な戦士よろしく平土間から女子修道院に入って戦うということ。